人生オワタ＼(^o^)／からポケモンの世界に転生した

ナンテコッタイ!!!＜(^o^)＞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人生オワタ＼（＾ｏ＾）／からポケモンの世界に転生した

【Ｎコード】
Ｎ２７８６Ｚ

【作者名】
ナンテコッタイ！！！＜（＾ｏ＾）＞

【あらすじ】
神のミスで死んでしまったポケモン好きの高校生タクヤは、ジョウトに転生することになった。使用するポケモンは生前ゲームで使っていたポケモンで、家にはポケモンの転送装置まである。タクヤはジムを回ってリーグに出場しようしようと考える。
※タイトル変更しました：旧名「ポケットモンスター　ジョウトに転生！？」

Prologue　転生前

？「ん？ここはどこだ……？」

俺はタクヤ。ポケモンが好きな高校生だ。今俺は、真っ白な空間にいる。

タクヤ「はぁ、何にもねぇな……。って、誰アンタ！？」

そりゃ驚くよ、いきなり空から人が降ってきたんだから。

「私は神だ」

タクヤ「ダメだ、ただの痛い人だ」

痛神「誰が痛い人だ！！って、↑のところまで痛神ってされてるし！！だから、私は神だって言っているだろうが」

タクヤ「で、神（笑）が一体何のようですか？」

神（笑）「お前今、神の後に（笑）付けただろ。しかもまた↑が変わってるし。まぁいい。お前には転生してもらう」

俺は耳を疑った。は？俺死んだの？

神「そう。お前はこの私のミスで死んだのだ」フンス

タクヤ「ちったァ悪びれろよ……」

神「だからせめてもの詫びとして、ポケモンの世界に転生してもらうことになった」

タクヤ「あ、あぁ。で、向こうに付いた時の手持ちは？地方は？」

神「お前、生前にポケモンしてただろ。手持ちとかのポケモンは生前にゲームで使っていたポケモンを使ってもらう。ボックスの代わりとして、転生後のお前の家になるところにでも転送装置を置いて

おこう。あと、ジョウト地方だ」
タクヤ「ありがとうございます」

実際に会えるのか、俺のポケモンたちに……

神「さて、ここでひとつだけ願いを叶えてやろう。何がいい？」
タクヤ「うーん……俺が願えばそのポケモンは個体値が６ｖになるとか？」
神「いいだろう。では、良い転生ライフを。お前のバックの中に細かいことを書いた紙を入れておく」
タクヤ「はい、ありがとうございます。って、うぉ！？」

床に穴があいた。うわぁ～～～落ちる～～～！！！

タクヤ「どうしてこうなった～～～～～～！？」

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　目覚めると２９番道路

タクヤ「ん、んん？」

俺は目を覚ました。あのクソ神後で殺しちゃる。で、ここはどこだ……？

タクヤ「とりあえずバッグとかの確認をするか。っと、手持ちはっと」

腰にはボールホルスターがついていて、６個のモンスターボールがあった。

タクヤ「えっと、こいつが色違いのテッカニンで、こいつがガブリアスか。これはハッサムで、これがゲンガーで、これはカイリキーで、最後がマルマインか……」

これはすべて俺が生前使っていたポケモンだ。特にお気に入りはテッカニン。ポケトレで手に入れた色違いの陽気なツチニンを育てた。

タクヤ「次はっと、これはポケギアで、こっちがトレーナーカードか……。どれどれ」

ポケギアのマップを確認すると、ここは２９番道路というのが分かった。トレーナーカードを見ると、名前はタクヤで、６年前にトレーナーになったことになっている。しかしバッジは一個もなし。誰かと旅したいから言い訳を考えとかないといけない。

タクヤ「で、これが図鑑で、バッグはこれか」

まず、図鑑の動作確認としてテッカニンを調べてみた。

テッカニン　忍ポケモン。ツチニンの進化系。鳴き声を聴き続けると、頭痛が収まらなくなる。見えないほどの速さで動く。

と、説明が流れた。

使える技は、虫食い、ひっかく、固くなる、吸血、すなかけ、乱れひっかき、心の眼、影分身、連続切り、嫌な音、剣の舞、切り裂く、高速移動、バトンタッチ、シザークロス――――――――――

ちょいちょい、いつまで続くんだよ、オイ。

――――――――――エアカッター、スピードスター、さわぐ、糸を吐く。

結局、テッカニンが覚える技の全てを覚えていた。

タクヤ「オイオイ、覚えられる技が４つより多くても大丈夫だとしても、覚えられる技全部覚えているとは……」

次にバッグを探ると、いろいろな回復道具やドーピング用品の他に紙が一枚入っていた。

タクヤ「なんだこの紙？何か書いてあるな、なになに？」

タクヤへ

お前の家はポケギアのマップで確認しておけ。

今の手持ちはそれだが、そのほかのポケモンはお前の家で放し飼いにされている。
お前の家になるところには、一人使用人を置いておいた。お前のいない間の家とポケモンの管理はその人に任せておけ。
では、良いトレーナーライフを。
神より

タクヤ「神からの手紙か……。ま、とりあえずマップ確認しながら家に行くか」

とりあえずワカバタウンを目指すタクヤであった……

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　ワカバタウンと俺のポケモンたち

タクヤ「っと、俺の家になるのはここか……」

どーも、タクヤです。つい先ほど転生してきた者です。
俺は今、ポケギアを確認しながら自宅に向かっているところです。
今、自宅を見つけました。

タクヤ「まぁ、入ってみるか……」

とりあえず門を開け、入ってみた。

？「おかえりなさいませ、タクヤ様」
タクヤ「うおっ！！」

玄関のドアを開けると、そこにはメイドが迎えていた。そのメイドは、金髪ロングな髪型で、スタイルもかなりいい。かなり美人だ。

タクヤ「あぁ、アンタが例の神様が用意した使用人？」
メイド「はい。神様から手紙を預かっています。こちらを」
タクヤ「おお、サンキュー」

メイドからもらった、神様からの手紙を読んでみた。そこにはこんな内容が書かれていた。

タクヤへ
自宅についたらメイドが迎えていただろう？その娘がお前のメイドだ。
家の管理、お前の身の回りの世話は基本その娘がする。　お前が

いない間のポケモンの世話や、ポケモンの転送などもしてくれるぞ。
　では本題だ。その娘には基本何してもいいぞ。むしろ何もしない方が損というものだろう。抱いても咎めないし、ほかの娘に変えて欲しいのなら変えてやる。さしずめ性欲〇理役として使ってもいいということだ。
　では良い性――――生活をな……
神より

タクヤ「ブッ！！！！」

　俺は吹き出してしまった。

メイド「どうされました？」
タクヤ「あ、アンタはこの手紙の内容知ってるのか？」
メイド「ああ、〇欲処理のことですか？」
タクヤ「ブフッ！！！そ、そうだよ。アンタはこれでいいのか？」
メイド「タクヤ様のご命令とあらば」
タクヤ「そ、そうか……」
メイド「もしかして、今から抱きたいと仰りますか？」
タクヤ「ち、違う違う！ちょっと確認しただけだ」
メイド「そうですか。では、家の中を案内しましょう」

　そう言われて、いろいろな部屋を見ていった。広すぎると思えるほどのリビングや、普通の家のリビングほどの広さもある俺の部屋。使用人の部屋などを見て回った。そして……

メイド「こちらから、ポケモンが放し飼いにされている庭に出ることができます。セキュリティは万全で、おそらくロケット団如きが入ることはできないでしょう……」
タクヤ「そうか……。おっ、アイツはカイリューか。こっちにはジ

ユカインもいるな……。湖の方にはギャラドスやスターミーもいるな……。また手持ち変更の時は頼むわ」
メイド「その説明ですが、まずは家の中に入りましょう」

俺たちは家の中に入り、リビングに来た。

メイド「このパソコンが、転送装置です」
タクヤ「へぇ……」

そこにはさほど大きくはないが、そこまで小さいわけでもないデスクトップパソコンと、その横にＵＳＢケーブルでつながれた、半球状のくぼみの付いた小さな機械があった。
メイドは半球状のくぼみの付いた機械を手にして言う。

メイド「まず、放し飼いにされているポケモンをボールに戻し、この機械にセットします」

そう言うと、次に小さめのノートパソコンと、同じ半球状のくぼみの付いた小さな機械を取り出した。

メイド「次に、同じくそちらでもボールをセットして、最後にパソコンでこのように操作すると転送されるのです」
タクヤ「ちょっと待て、パソコンのバッテリーは？」
メイド「それは神様の力を使って、永久電池にしてあるので大丈夫です。では、こちらのパソコンと転送装置を渡しておきます」
タクヤ「それはそれでどうかと思うんだが……。ま、いいか。俺はとりあえず疲れたから寝るわ」
メイド「私と一緒に？」
タクヤ「『疲れたから』と言ったのが聞こえなかったか？お前と一緒に寝たら理性が持ちそうにないんだが……」

メイド「冗談です。いつごろ起こせばいいでしょうか？」

このメイド、意外と茶目っ気があるようだ。それにしてもいつごろ起こしてもらおうかな……

タクヤ「じゃあ、飯ができたらでいいよ。旅立つのは明日にする。ウツギ博士の研究所にも行きたいしな」

メイド「了解しました。ではおやすみなさい」

タクヤ「おう、おやすみ」

とりあえず俺は、自室に来た。

ベッドに寝転がり、さっきまでのことを振り返る。

タクヤ「ふぅ、何かいろいろありすぎたな。美人のメイドさんといい、性欲処〇役といい、精神的に疲れたよ……。ま、明日は旅立ちか……」

俺は目を閉じる。するとすぐに意識は眠りに落ちていった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　ウツギ研究所と新人トレーナー

タクヤ「はぁ。昨日はいろいろありすぎて疲れた……」

ども、タクヤっす。昨日は散々でした。メイドに起こされて飯を食いに行ったら、メイドに「あーん」されそうになったし、風呂には突入してくるし……

タクヤ「ま、今日から旅立ちだしな！強気で行くぜ」

そう。今日は旅立ちなのだ。

タクヤ「そういえばジョウトではポケモンを一匹出しておくのが流行っているんだっけ？よし、出てこいハッサム」

ハッサム『ハッサム！！！』

タクヤ「ハッサム、今日は旅立ちだから強気で行くぞ。今日からよろしくな」

ハッサム『サム、ハッサム！！』

メイド「おや？タクヤ様、もう行かれますか？」

タクヤ「ああ。家のことは頼んだぞ？行くぞハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！！』

メイド「行ってらっしゃいませ、タクヤ様、ハッサム」

いよいよ旅立ちだ。新人トレーナーがいたら一緒に旅しようかな。いっそ鍛えてやろうか……

そんなことを考えているうちに、ウツギ研究所についた。そういやウツギ博士って研究中は周りのことが見えなくなるんじゃなかったっけ。

タクヤ「ごめんくださーい！」
ハッサム『ハッサム、ハッサーム！』
？「はーい？どちら様？」
タクヤ「どうも、トレーナーのタクヤです。こっちはハッサム」
ハッサム『ハッサム！』
タクヤ「こちらの研究者さんですか？」
研究員「そうだよ。博士に用事？」
タクヤ「まあ、トレーナーとして会っておきたいので」
研究員「そうか。じゃあ入って」
タクヤ「失礼します」

研究所に入った俺たち。そこには新人用のポケモンである、チコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、それを見ているウツギ博士がいた。

タクヤ「ウツギ博士」
ウツギ「ん？誰だい君は？」
タクヤ「トレーナーのタクヤです。昨日ワカバタウンに引っ越してきたんです」

そう。俺の出身は一応カントーのタマムシシティになっている。昨日引っ越してきたことになっているのだ。

ウツギ「そうか、君が引っ越してきたのか……。そのハッサムは君のかい？」
タクヤ「そうです。ほらハッサム、挨拶しろ」
ハッサム『サムサム、ハッサム！！』
ウツギ「ははは、元気がいいね。で今日はどういった用事かい？」
タクヤ「まあ、引越しの挨拶と、トレーナーとしてウツギ博士に会っておきたかっただけです。まあ、今日旅立ちの新人はいないかな

？とか考えてたりしますけど」
ウツギ「新人かい？それなら二人居るよ。一人はブリーダーを目指してるとか」
タクヤ「マジすか？名前はなんですか？」
ウツギ「確か、コトネちゃんとカズナリ君だったかな」

マジか？あのシンオウに来てサトシたちと会ったアイツらか。

タクヤ「俺も会ってみたいです。いいスか？」
ウツギ「もちろんだよ。先輩として色々と教えてあげて欲しいし。そういえば君はジムを回ってるのかい？」
タクヤ「俺は元々研究職に就きたかったからトレーナーになっただけですからジムは回ってないんです。でも最近実力を試したくなったので」
ウツギ「そうか。応援してるよ」
タクヤ「はい。ありがとうございます」

そんな話をしてる間にハッサムはチコリータたちと遊んでいた。

ハッサム『サム、ハッサムハッサム、サム』
チコリータ『チコ！』
ワニノコ『ワニワニワニ！』ヒノアラシ『ヒノー！』
ハッサム『サムー』

仲良くなってるし……

ウツギ「図鑑は持っているかい？」
タクヤ「自作のならこれを」

図鑑は自作ということにしてある。

ウツギ「自作！？君はすごいね！！」
タクヤ「いえいえ」

そんなことをしていると、新人トレーナーが来たようだ。

コトネ「こんにちは～！」
マリル『リルル～』
カズナリ「待ってよコトネ～」
コトネ「カズナリ遅い！」
ウツギ「こんにちは、コトネちゃん、カズナリ君」
タクヤ「こんにちは」
コトネ「こんにちは～。この人は？」
タクヤ「ああ、俺はタクヤ。昨日引っ越してきたトレーナーだよ」
カズナリ「はぁはぁ。こんにちは、ウツギ博士。こちらの人は？」
ウツギ「昨日引っ越してきたタクヤ君だよ」
タクヤ「で、そこのチコリータたちと遊んでいるのが俺のポケモンのハッサムだ。ほらハッサム、挨拶だ」
ハッサム『ハッサム！サムサム、ハッサムー！』
コトネ「私はコトネで、こっちがマリル。よろしくって事ね、ハッサム」
マリル『リルル～』
カズナリ「僕はカズナリです。よろしくお願いします」

はぁ、アニメに出てきたコトネとカズナリそのものだ。

ウツギ「じゃあ、新人トレーナー用のポケモンをあげるから、この三匹から選んでね」
タクヤ「みんな頼りになるぞ」
コトネ「うーん、どの子にしようかな……」

カズナリ「そうですね～……」

かれこれ１０分。悩んだ末に……

コトネ「じゃあ、私はチコリータにします。チコリータ、よろしくって事ね」

カズナリ「じゃあ、僕はワニノコにします」

チコリータ『チッコー！！』

ワニノコ『ワニワニ！』

ヒノアラシ『ヒノ～……』

ハッサム『ハッサム、サム』

選ばれたチコリータとワニノコはとても喜んでいて、選ばれなくて落ち込んだヒノアラシをハッサムが慰めていた。

タクヤ「そうだ。君たちの旅に俺もついてっていいか？」

カズナリ「タクヤさんが？」

コトネ「勿論、いいって事ね」

チコリータ『チコ！！』

ワニノコ『ワニー！』

ハッサム『サムサムー！！！』

タクヤ「サンキュー。ハッサムもこいつらと仲がいいみたいだし、喜んでるよ」

ということで、俺たちは旅立っ――――

ウツギ「ちょっと待ってくれるかい？」

タクヤ「何ですか？ウツギ博士」

ウツギ「タクヤ君にヒノアラシを貰って欲しいんだ」

タクヤ「いいんですか？」

ウツギ「君のハッサムと仲良くなったみたいだし、引き離すのもかわいそうだからね。君だったら悪いようにはしないだろうし」
タクヤ「ありがとうございます」

俺はバッグからパソコンと転送装置を出した。

ウツギ「何だいそれは？」
タクヤ「自作の転送システムで家と繋げるんです」
ウツギ「それも自作？すごいね君は」
コトネ「ほんとにすごいって事ね」
タクヤ「もしもし？」
メイド［タクヤ様、どうされました？］
タクヤ「早速手持ちの入れ替えだ。俺はそっちにカイリキーとマルマインを送る。そっちはバクフーンを送ってくれ」
メイド［わかりました］

手持ちの入れ替えが終わった。

タクヤ「よし改めて、ヒノアラシゲットだ！」
ハッサム『ハッサム！』
タクヤ「よし、出てこいバクフーン！」
バクフーン『バクッ！』
カズナリ「うわー、バクフーンだ！」
タクヤ「バクフーン、ヒノアラシの世話を頼む。ハッサムも協力してくれ」
バクフーン『バク！』
ハッサム『ハッサム！』

バクフーンは背中にヒノアラシを乗せた。

カズナリ「こう見ると親子みたいですね」
バクフーン『バクバク！』
ヒノアラシ『ヒノー♪』
タクヤ「もう仲良くなったみたいだな。じゃあ行くぞ、コトネ、カズナリ」
コトネ「うん！」
カズナリ「はい！」
ハッサム『ハッサム！』
ウツギ「じゃあ気を付けてねー」

俺たちは研究所を後にした。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　自己紹介　新人トレーナーコトネ＆ａｍｐ；カズナリ

どうも、タクヤです。２９番道路に来ています。

タクヤ「とりあえず改めて自己紹介しようか。まず俺から」

俺は一息置いて自己紹介を始める。

タクヤ「俺はタクヤ。年は１６だ。トレーナー歴６年で今年が７年目だ。俺はもともと研究職のほう希望だったからジムは回っていないが、実力を試したいから今年からジムを回る。敬語とか、そういうのはいいからな」

カズナリ「よろしくお願いします」

コトネ「よろしくって事ね」

タクヤ「で、手持ちのポケモンは、ここにバクフーンとハッサム、さっき貰ったヒノアラシだろ。であと三体はこいつらだ！」

俺は３つのボールを投げた。するとポケモンが出てくる。

タクヤ「テッカニンとゲンガー、ガブリアスだ」

コトネ「すごい！テッカニンの色違い！？」

カズナリ「ガブリアスも強そうです！」

テッカニン『テッカ！！』

ゲンガー『ガー！！』

ガブリアス『ガァブッ！』

次はコトネの番か……

コトネ「私はコトネ。こっちはマリル。で、さっき貰ったチコリー

タ。よろしくって事ね」
マリル『リルル～』
ハッサム『ハッサム！』
チコリータ『チコー！』
カズナリ「僕はカズナリです。こっちがさっき貰ったワニノコ」
ワニノコ『ワニワニ！』
タクヤ（そういや、俺が願えばポケモンの個体値が６ｖになるように神に能力もらったんだっけ）

俺はチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシを６ｖにすべく願う。

タクヤ（チコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値を６ｖにしろ！）

そう願った。すると、頭に念話が届いた。

神［早速６ｖの願いか……］
タクヤ［神様！？］
神［願い、届いたぞ。今よりチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値は６ｖだ］
タクヤ［サンキュー神様］

この念話の時間僅か０．０１秒。

タクヤ「まぁよろしくな、コトネ、カズナリ」
コトネ「うん」
カズナリ「はい」
タクヤ「そうだ。コトネ、さっきもらったポケモンでバトルしようぜ」

コトネ「いいね、それ」
カズナリ「はい」
タクヤ「カズナリ、審判頼む」
カズナリ「わかりました」

俺はヒノアラシを呼び寄せ、肩に乗っけた。

カズナリ「これより、タマムシシティのタクヤ対ワカバタウンのコトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体です」
タクヤ「行くぜぇヒノアラシ！」
ヒノアラシ『ヒノーーー！！！！！』

背中の炎が燃え上がった。

タクヤ「まずは使える技の確認っと……」

ヒノアラシ　火鼠ポケモン。憶病で、いつも体を丸めている。襲われると、背中の炎を燃え上がらせて身を守る。
使える技は　体当たり、煙幕、睨みつける、火の粉、火炎車、丸くなる、スピードスター、火炎放射、転がる――――

やはり使える技の全てを覚えていた。しかし音量を小さくしているので、二人は気づいていない。

コトネ「行くわよチコリータ！」
チコリータ『チッコー！！』

チコリータとヒノアラシはにらみ合う。確かこいつは光の壁が使えたな……。ソーラービームにも注意しないと。

タクヤ「先行はそっちでいいぜ」
カズナリ「先行はコトネから。では、始め！」
コトネ「先手必勝！チコリータ、葉っぱカッター！」
タクヤ「ヒノアラシ、ジャンプだ！」
チコリータ『チィー、ッコー！！』
ヒノアラシ『ヒノーーーー！』

チコリータは葉っぱを飛ばすが、ヒノアラシは飛び上がった。

タクヤ「ヒノアラシ、回転しながら煙幕撒布！」
ヒノアラシ『ヒノォーーー！』
コトネ「チコリータ、気を付けて！」
チコリータ『チー』
タクヤ「残念、ヒノアラシは地面の下だ！ヒノアラシ、地面から顔を出して火の粉！！！！！」
ヒノアラシ『ヒノー！！！！！』
コトネ「す、すごい。穴から顔を出して攻撃なんて……！」
タクヤ（貫ったばかりなのにスピードもパワーも段違い。おまけに技は全部使える。どういうことだ……？？）

考えていると、またもや念和が来た。

神［どうだ？お前のポケモンのパワーは］
タクヤ［どういうことだ？］
神［お前が手に入れた時点ではそう強くないが、６ｖにしたときにお前のポケモン限定で、全能力の努力値を２５２にするのと、技をすべて覚えさせることをした］
タクヤ［だからか……］

この間僅か０．０１（ｒｙ

タクヤ「さぁ、これで終わりだ。丸くなるの後に転がる！」
ヒノアラシ『ヒノォーーー！』
チコリータ『チコー。チコォ……』
コトネ「ああ、チコリータ！」
カズナリ「チコリータ、戦闘不能。よって勝者、タマムシシティのタクヤ！」
タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。バクフーン、お前も褒めてやれ」
バクフーン『バクバク！』
ヒノアラシ『ヒノォ／／／』
コトネ「さすが先輩トレーナーって事ね。大丈夫、チコリータ？」
チコリータ『チコォ……』
タクヤ「なぁ、コトネ、カズナリ」
コトネ「何？」
カズナリ「なんでしょう？」
タクヤ「戦った相手のポケモンによって、能力の伸びが変わることって、知ってるか？」
コトネ「エッ？」
カズナリ「本当ですか？」

とりあえず、こいつらに努力値の理論を教えるとしよう。

タクヤ「これは本当だ。例えば、攻撃を伸ばしたかったらオタチやワンリキーなんかを倒すといい。スピードならビリリダマやポッポなんかだ。特殊攻撃ならケーシィやゴース。防御ならイシツブテやグライガーだ。特殊防御ならメノクラゲやバリヤードだ。また、性格によっても伸びやすい能力、伸びにくい能力がある。陽気なら、特殊攻撃は伸びにくいし、素早さが伸びやすいという具合だ。これは俺が研究した」

もちろん嘘だ。ただの現実世界の廃人知識だ。

タクヤ「見た感じワニノコは生意気で、チコリータは真面目、マリルはやんちゃって感じだろ？生意気な性格は特殊防御が伸びやすく、素早さが伸びにくい。真面目は平均的に伸びる。やんちゃは攻撃が伸びやすく特殊防御が伸びにくいんだ」

ヒノアラシはさしずめ無邪気ってところだろう。この世界では物理技も使うからちょうど良く二刀流にすることにした。

タクヤ「だから、これを踏まえて修行すれば、絶対に強くなれる」
コトネ「ありがとう」
カズナリ「勉強になりました」
タクヤ「とにかく、傷ついたチコリータはボールに戻して、ヨシノシティのポケモンセンターを目指そうぜ」
コトネ「うん」
カズナリ「はい」

また俺はヒノアラシをバクフーンの背中にのせ、ハッサム、バクフーンと共に歩きだした。目指すはヨシノシティ！

To Be Continued・・・

Setup1　タクヤ

〜名前〜
タクヤ

〜姿，服装〜
髪型のイメージは生徒会の一存の杉崎鍵
顔は基本的に糸目だが、ここぞというときには目を見開く
細身の黒いフレームのメガネをかけている
身長は１７８ｃｍくらい
服装はグレーのズボンに空色のＹシャツで、上にベージュのコートまたは黒のパーカーを着ている
また、偶にだがスーツを着ることがある

〜人物〜
年は１６
基本的に仲間や友人、他人には優しいが、自分の気に入らない行動をする人や、敵には容赦をしない
怒ると物凄く怖い
ポケモン廃人

〜ポケモン〜
転生時の手持ちは色違いのテッカニン、ガブリアス、ゲンガー、ハッサム、カイリキー、マルマイン
自宅にはたくさんのポケモンがいる

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　ポケモンセンターとコトネの初ゲット

タクヤ「ここがヨシノシティか……」

どーも、タクヤです。ただいまヨシノシティに来ております。

タクヤ「おーい、コトネー、カズナリー！ポケモンセンター行くぞー！」
コトネ「待ってー！」
カズナリ「待ってくださーい！」

俺たちはポケモンセンターに来た。まずはポケモンの回復をしないとな……

タクヤ「ほら、回復してもらうぞ。戻れハッサム、バクフーン、ヒノアラシ」
コトネ「あっ、私も」
カズナリ「僕も」
タクヤ「ジョーイさん、どのくらいで回復は終わりますか？」
ジョーイ「一時間くらいです。そういえば、ジョウトリーグの出場受付はしましたか？」
タクヤ「あっ、まだです。はい、トレーナーカードと図鑑。お願いします。コトネ、カズナリ、お前らはリーグ出場しないのか？」
コトネ「カズナリはしないけど私はするって事ね。図鑑とトレーナーカード、お願いします」
ジョーイ「はい、わかりました」

数分後、受付を終えたのか、ジョーイさんが戻ってくる。

ジョーイ「はい、終わりました。では、頑張ってジムバッチを８つ全て集めてください」
タクヤ「はい。ありがとうございます」
コトネ「ありがとうございます」
タクヤ「ああ、カズナリはどうするんだ？」
カズナリ「僕はブリーダーを目指しているので」
タクヤ「そか」

うーん、これからどこで時間を潰そう……

タクヤ「そうだ！コトネ、カズナリ、西の海岸で釣りしようぜ」
コトネ「釣り？」
カズナリ「いいですね。しましょうよ」
タクヤ「おう」

俺たちは海岸へ向かった。さて、何が釣れるか……

タクヤ「まず、コトネは女の子だからこの軽いやつにしておこうか」
コトネ「ありがとうって事ね」
タクヤ「カズナリも非力そうだからこれかな？」
カズナリ「非力って……」
タクヤ「で、俺はこれで。餌はこれを自由に使っていい」

と言って、神様からもらったバッグに入っていたポケモンフーズを差し出した。

タクヤ「じゃ、俺から行くぜ！」

俺が海に糸を垂らす。すると二人も順に垂らしていった。

――――十分後――――

暇だ。釣れない。

タクヤ「何も釣れねぇ……」

そんなことをつぶやいた直後、コトネの釣竿がクイッ、と引っ張られた。これは大きいな。

コトネ「ちょっ、一人じゃ無理！」

タクヤ「ハァ……。ちょっと貸してみろ。フンッ」

俺がリールを巻いたり、引っ張ったりしても少し動くだけ。かなりでかいな……

コトネ「もう無理ー！」

タクヤ「諦めんな！う、うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

俺は雄叫びを上げながら思いっきり引き上げた。するとそこに食

いついていたのは……

キングラー『ゴキゴキ！』

超デカイキングラーだった。

コトネ「うわぁ、キングラーだ！」

コトネは図鑑を取り出し検索した。

キングラー　ハサミポケモン。クラブの進化系。あまりにも　大きくなりすぎた　ハサミは　持ち上げるのが　やっとで　狙いは　上手く　付けられない。

タクヤ「やっべぇ、ポケモン預けててていねぇじゃん！」

カズナリ「そうですよ、ポケモンセンターに預けてるんですよ！」

そう、ポケモンセンターに預けているためポケモンがいないのだ。

タクヤ「しょうがない、転送装置で。おい！」

メイド［なんでしょう］

タクヤ「緊急事態だ！マルマインを送れ！」

メイド［了解しました］

タクヤ「よっしゃぁ！来い、マルマイン！」

マルマイン『マルン！マルルルルン！』

タクヤ「マルマイン、少しの間コトネの言うことを聞いてくれ！」

マルマイン『マルルン！マルン！』

タクヤ「コトネ、俺のマルマインを使え！」

コトネ「ありがとうって事ね！技は！？」

タクヤ「多分お前の思いついた技はたいてい覚えてるぞ！適当に弱

らせろ！」
コトネ「わかった！マルマイン、１０万ボルト！」
マルマイン『マルルルルル！！！』
キングラー『ゴキゴキ！！！』

キングラーは１０万ボルトが直撃し、仰け反ったが体制を立て直してハサミを構えた。

タクヤ「来るぞ、クラブハンマーだ！マルマインは素早いからよけられるはずだ」
コトネ「マルマイン！避けてから転がる！」
キングラー『ゴキ！ゴキゴキッ！！』
マルマイン『マル！マルルル！』
キングラー『ゴキッ！』
コトネ「マルマイン！電磁波！」
マルマイン『マルルルルルルル』
キングラー『ゴ、ゴキ……ゴ……キ』
タクヤ「今だ、コトネ！」
コトネ「行けっ、モンスターボール！」

キングラーはボールに収まり、スイッチが点滅し、揺れ始めた。
一回。二回。三回。パチンッという音が鳴った。

コトネ「キングラー、ゲットって事ね！」
カズナリ「やったじゃないかコトネ！」
タクヤ「スゲェぞコトネ」
コトネ「そんなに褒められると照れるって事ね」
マルマイン『マル、マルルルルン』
タクヤ「コトネのサポート、サンキューなマルマイン」
マルマイン『マルルン♪』

タクヤ「じゃあ戻れ、マルマイン」

俺はマルマインをボールに戻し、転送した。

タクヤ「そうだコトネ、キングラーを出してくれ」
コトネ「わかった。出てきてキングラー！」
キングラー『ゴキ……ゴ……キ』
タクヤ「やっぱ傷ついてるな。えっと、こうしてこうしてっと」

俺はキングラーの処置をした。

タクヤ「はい、終わり」
カズナリ「すごいですねー。ブリーダーとして見習わないと」
キングラー『ゴキッ！ゴキゴキッ♪』
タクヤ「そろそろポケモンセンターで治療も終わったんじゃないか？」
コトネ「そういえば忘れてた。行こうって事ね」
カズナリ「そうだね」

俺たちはまたポケモンセンターに向かっていった。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　キングラーの初バトル！？　高速蟹の恐怖！！

タクヤ「ジョーイさん、回復終わりましたか？」
ジョーイ「はい、終わりましたよ。あら？そのキングラーさっき捕まえたの？」
コトネ「そういう事ね」
キングラー『ゴキゴキ』
カズナリ「手持ちがない状態で出てきたので大変でした」
タクヤ「だな」
ジョーイ「君たち、最初のジムのことなんだけど、ここから北北西に最初のジムの街、キキョウシティがあるわ」
タクヤ「マジすか？ありがとうございます」
ジョーイ「頑張ってくださいね？」
コトネ「頑張るって事ね、キングラー」
キングラー『ゴキッ！ゴキゴキッ！』

俺たちは最初のジムの街、キキョウシティへ向かうため、ポケモンセンターを後にした。

タクヤ「ここは３０番道路だな……」
コトネ「キキョウシティはどのくらい先にあるの？」
カズナリ「この本によると、結構歩くみたいだよ」
タクヤ「ま、歩くのも旅の醍醐味だ」
？「ちょっといいかい？」

俺たちはキキョウシティを目指して歩いていると、誰かが話しかけてきた。

タクヤ「誰だい？」

シュウ「僕はシュウ。この中の誰か、僕と勝負してくれないか？」
タクヤ「勝負か……。コトネ、お前がしたらどうだ？」
コトネ「えっ、私！？別にいいけど……」
タクヤ「よし決まりだ。カズナリ、審判な」
カズナリ「はい」

シュウとコトネの勝負が決まり、ちょっとした広場に向かう俺達。

カズナリ「これより、コトネ対シュウのポケモンバトルを始めます！お互い使用ポケモンは一体！どちらかが先に戦闘不能になったとき、負けとします！なお、道具の使用は認められません！」
コトネ「じゃあ私から行くわ！行けっ、キングラー！」
キングラー『ゴキゴキッ！』
タクヤ「ほう、キングラーの初バトルか……。あ、そうだ６ｖ６ｖ」

俺はキングラーを６ｖにしろと願った。これでキングラーは６ｖだ。

タクヤ「さて、シュウとやらは何を出してくるか……」
シュウ「相手はキングラーか……。それなら、行けっスピアー！」
スピアー『スピスピ！』
タクヤ「スピアーか……。こりゃあスピードが厄介だぞ……」
コトネ「スピアーか……」

コトネは図鑑を取り出し、スピアーと、キングラーの技を調べた。

スピアー　毒蜂ポケモン。コクーンの進化系。どんな　相手でも
強力な　毒針で　仕留めてしまう。偶に　集団で　襲ってくる。

キングラー　使える技は、高速移動、怪力、馬鹿力、剣の舞、クラ

ブハンマー、鉄壁、はさむ。

タクヤ「高速移動？遺伝技じゃないの？」
コトネ「高速移動と剣の舞が使えるのね、キングラー」
カズナリ「それでは、始め！」
コトネ「まずはこっちから行くわ！キングラー、高速移動！」

カズナリの相図でコトネが先手を決めた。

キングラー『ゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキ！！！！！！！』
タクヤ「は、早(はえ)ぇぇぇぇ！！！！」
シュウ「な、なんなんだよそれ、本当にキングラーか！？クソッ！
スピアー、ダブルニードル」
スピアー『スピッ！』
コトネ「まだよ！キングラー、もう一回高速移動でスピードを上げてかわして！」
キングラー『ゴキゴキゴキッ！！！』
シュウ「あ、当たらない！？」
コトネ「今度はこっちの番！キングラー、剣の舞３連発！」
キングラー『ゴ、ゴキィィィィィィィィイッツッツッツ！！！！！！』
タクヤ「……ああ、どんどんキングラーが凶悪に……」
シュウ「まだまだ！スピアー、シザークロス！」
スピアー『ス、スピアァァァァァァァ！！！！』
コトネ「まだまだ高速移動！！」
キングラー『ゴキァァァァァァ！！！！』
コトネ「いくわよっ！キングラー、怪力！！！」
キングラー『ゴキィィィィィィィィイッツッ』

俺は目を疑った。キングラーが、なんと、飛翔(と)んだのだ！

ギュンッ！！、と風切り音が鳴ったと思ったら、スピアーより遥か上にキングラーがいて、そのまま高速落下して怪力を決めた。

スピアー『スッ！？スピィィィィィィィィィィィッッ！！！！！！！』

シュウ「スピアー、かわせっ！かわすんだ」

シュウの叫びも虚しく、キングラーの高速かつ強力な一撃で勝負は決した。

タクヤ「……こんな戦い方も、あるんだな……」

そんな小さなタクヤの呟きが、虚空に消えた。

スピアー『……ス……スピ……スピァ……』

カズナリ「スピアー、戦闘不能！よって勝者、コトネ！」

タクヤ「すごかったぞ、コトネ」

コトネ「やったぁ！！！」

シュウ「ありがとう、コトネ。君のキングラー、すごかったよ」

コトネ「ありがとう、シュウ」

シュウ「まさか、キングラーが飛翔ぶとは思わなかったよ」

カズナリ「僕も、目を疑いました」

これ以来このバトルは、俺の記憶の中で、「高速蟹の恐怖」と名付けられた。

次に向かうはキキョウシティ！

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　キキョウシティ　マダツボミの塔のオバケ騒動！！

タクヤ「ついたぞ、ここがキキョウシティだ」

どーも、タクヤです。俺たちは今、やっとキキョウシティにつきました。

タクヤ「こんばんは、ジョーイさん」

そう、「こんばんは」ということからわかるように、ついたのは夜だった。

ジョーイ「はい、こんばんは」

コトネ「あれ？ジョーイさんさっきまでヨシノシティにいませんでしたか？」

ああ、アニメポケモンのあの設定知らないのか……

タクヤ「コトネ、カズナリ、これを見ろ」

コトネ「えっ！？」

カズナリ「これって！？」

俺が見せたのはガイドブックのようなものだ。つまり……

コトネ，カズナリ「みんな同じ顔！？！？」

タクヤ「そ。全国のジョーイさんは全員がそっくりで、しかも何らかの繋がりがあるんだ。ああ、ジュンサーさんも同じだぞ」

カズナリ「それは知りませんでした……」

コトネ「すごいわね」

タクヤ「ま、それはそうとして、ポケモンの回復お願いします。あと、部屋はあいてますか？」
ジョーイ「はい、お預かりします。部屋は二人部屋が一部屋だけならあいてますよ」
タクヤ「そっすか。じゃあそことっておきます」
ジョーイ「はい」
コトネ「二人部屋って、一人どうするの？」
カズナリ「まさか野宿するんじゃ！？」
タクヤ「バカ言え。俺はソファとかで寝るからベッド使え」
コトネ「それはタクヤに悪いよ」
カズナリ「そうですよ。タクヤさんがベッド使ってください」
タクヤ「人の好意は素直に受け取るもんだぞ？」
カズナリ「わかりました。ありがたく使わせてもらいます」
コトネ「ありがとう、タクヤ」ニコッ
タクヤ「お、おう。どういたしまして。じゃ、じゃあおやすみ／／／」

俺たちは眠りにつき、朝を迎えた。

タクヤ「よし！ジム行くぞ！」
コトネ「おー！」
カズナリ「頑張ってください！」
タクヤ「おう！」

俺たちはジムに行き、ジム戦の予約をしようとしたのだが……

受付「お二人はマダツボミの塔には行かれましたか？そこでお坊さんのお師匠様に勝たなければジム戦は認められません」
タクヤ（ヤベッ、忘れてた）
コトネ「そんな～」

カズナリ「ま、まあ行けばいいじゃないか」
受付「それはそうと、こんな噂を知っていますか？」
タクヤ，コトネ，カズナリ「噂？」
受付「なんでもマダツボミの塔は夜に登ると、オバケが出るそうですよ」
カズナリ「お、オバケ～！？」
タクヤ「面白そうじゃん。どうせなら夜に行こうぜ！（どうせオバケの正体はゴースだと思うし、こいつらのどちらかに捕まえさせたいし）」
カズナリ「え～！？」
コトネ「あ～、カズナリ怖いんだ～」
タクヤ「ま、いいや。さっさと夜まで時間潰そうぜ」
カズナリ「そ、そんな～……」

俺たちは夜まで時間を潰し、マダツボミの塔に来た。

タクヤ「よし、来たぞマダツボミの塔！」
コトネ「じ、実際に見ると結構雰囲気あるって事ね……」
カズナリ「もうやめましょうよ～」
タクヤ「よし、いくぞ～！」

俺は二人に有無を言わさずマダツボミの塔に入った。

タクヤ「ま、一応ポケモン出しとくか。出てこいテッカニン！」
テッカニン『テッカ！』
コトネ「うう、マリル～」
マリル『リルル～！』
カズナリ「」気絶中　俺が引っ張ってる

うーん、何もない。

と、そのとき……

？『ゴースゴスゴスゴスwww』
？『ゴースゴスゴスゴスwww』
？『ゴースゴスゴスゴスwww』
コトネ「！？　笑い声が！」
タクヤ「やっぱこの声はアイツかよ」
カズナリ「アイツ？」
タクヤ「テッカニン、素早さで翻弄して当たり一体を辻斬りでかき回せ！」
テッカニン『テッカ！』
？『ゴ？ゴーーース！！ゴースゴス、ゴース！！！』
タクヤ「さて、さっさと姿を見せろ、ゴース！」
コトネ「ゴース！？」
カズナリ「と、いうことは幽霊の正体って」
タクヤ「そういうことだ」

そこでコトネが図鑑を取り出した。

ゴース　ガス状ポケモン。薄い　ガスのような　体で　何処にでも
　忍び込むが　風が　吹くと　吹き飛ばされる。

ゴースA『ゴ……ゴース』
ゴースB『ゴスゴス！』
ゴースC『ゴース！』
タクヤ「さ、テッカニン、もう一回辻斬り！」
テッカニン『テッカ！テッカ！』
ゴースA『ゴ～……』

一体のゴースは完全に戦闘不能になってしまった。

ゴースB『ゴース！！！！』
ゴースC『ゴスゴス、ゴース！！！』
コトネ「ゴースと分かれば怖くないって事ね。マリル、水鉄砲！」
マリル『リィ、ルゥゥゥゥゥゥ！！！！！』
ゴースC『ゴ？ゴォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！』

さらにもう一体のゴースは水鉄砲で場外に吹っ飛ばされた。

カズナリ「ワニノコ、お願いします！」
ワニノコ『ワニワー！！』
カズナリ「噛み付く！」
ワニノコ『ワニっ！』
ゴース『ゴ！？ゴ……ース』
カズナリ「今です！モンスターボール！」

カズナリはモンスターボールを投げた。スイッチ部分が点滅し、ボールが揺れる。数回揺れたところで、パチンッ！という音が鳴った。

カズナリ「ゴース、ゲットです！！」
ワニノコ『ワニワニワー！！』
タクヤ「良かったな、カズナリ」
コトネ「そうね」
タクヤ「じゃ、お坊さんのお師匠様に会いに行こうか」
カズナリ「はい！」
コトネ「うん！」
テッカニン『テッカ！！』
ワニノコ『ワニっ！』
マリル『リルゥ』

こうして、ゴースをゲットしたカズナリ。次に目指すは、マダツボミの塔の頂上。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　マダツボミとお師匠様！！

タクヤ「ふぅ、やっと頂上か……」
コトネ「高いって事ね……」
カズナリ「疲れた……」
マリル『リルル～』

ここはマダツボミの塔の頂上。あれがお坊さんのお師匠様だろう。
ここまでくるのは大変だった。ゴースが他にもいて、カズナリのゴースに説得を任せたり、お坊さんが立ちはだかったり。

タクヤ「貴方がここのお坊さんのお師匠様、ですね？」
師匠「いかにも。こんな夜更けに、お主らはわしに挑戦するのか？」
タクヤ「はい」
コトネ「私もです」
師匠「よかろう。ではまずそちらの少年、バトルを始めようか」
タクヤ「はい！」
坊主「では、ただいまより、お師匠様対挑戦者のタクヤのバトルを始めます！お互い使用ポケモンは三体！先にすべてのポケモンを失ったものの負けとします！」
タクヤ「行くぜヒノアラシ！」
ヒノアラシ『ヒノヒノォ！！』
師匠「行きなさいマダツボミ！」
マダツボミ『マダツボ～』
坊主「それでは、始め！」
師匠「こちらから行かせていただこう。マダツボミ、ツルの鞭！」
マダツボミ『マダマダ～』

ツルの鞭がヒノアラシに襲いかかる。

タクヤ「ヒノアラシ、バックステップで交わしてジャンプ！そこからフィールド全体に火炎放射！」
ヒノアラシ『ヒノッ、ヒノッ、ヒノッ！ヒノッッッッ！！！ヒィィィィ、ノォォォォォォォォォォォォ！！！！！』

フィールド全体を炎が包む。そこに居たのは黒焦げになって倒れているマダツボミだった。

坊主「マダツボミ、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」
タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。もう一回頼む」
ヒノアラシ『ヒノッ』
師匠「ほう。お主なかなかやりおるな。ポケモンへの気遣いも忘れない。良いトレーナーじゃな。次は、ウツドン！行きなさい！」
ウツドン『ウツドォン……』
タクヤ「ありゃ、進化系か」
コトネ「あれがウツドン。さすがお師匠様。持ってるポケモンが違うって事ね」

ウツドン　ハエ取りポケモン。マダツボミの進化系。体内では　強力な　溶解液を　精製しているが、それを　分解する　物質も　精製しているので　自分は　溶けたり　しない。

タクヤ「相手にとて不足なし！ヒノアラシ、穴を掘る！」
ヒノアラシ『ヒノヒノッ！！』
師匠「ウツドン、地面の揺れを感じるんじゃ」
ウツドン『ウッツドォン！』

カタ、カタ、と地面が揺れる。だが……

師匠「ウツドン、そこじゃ！ソーラービーム！」
ウツドン『ウツドォォォォォォォォォォン！！！！！』
タクヤ「フッ。ヒノアラシ、噴火！」
ヒノアラシ『ヒノォォォォ！』

揺れたのはダミー。後ろではなくしたから噴火を繰り出した。これだけでウツドンは戦闘不能になる。

師匠「まさか、ここまでとは」
坊主「ウツドン、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」
師匠「では、こちらを倒せるかな？来い、ヨルノズク！！！」
ヨルノズク『クルルルル！！！！』
カズナリ「ヨルノズクですか！？」
タクヤ「まだ行けるな、ヒノアラシ？」
ヒノアラシ『ヒノッ！』

そのとき、ヒノアラシの体が光に包まれた。

コトネ「あの光は！！」
カズナリ「進化ですか！？」
タクヤ「進化か……」
マグマラシ『マグッ！！』
師匠「お主のヒノアラシ、進化したか……。ヨルノズク、ゴッドバード！」
ヨルノズク『クルルルルル！！！！』

ヨルノズクの体が淡く発光する。

タクヤ「マグマラシ、スピードスター！」
マグマラシ『マグゥ！！』

ヨルノズク『クルッ！？クルルルルル！』

マグマラシの星形の光線がヨルノズク目掛けて飛んでいく。だが、ヨルノズクもゴッドバードの溜めを終え、突進してくる。

師匠「ヨルノズク、ゴッドバードの起動を変えてマグマラシに攻撃しなさい！」

ヨルノズク『クルルル！クルッ、クルッポー！！！』

マグマラシ『マグマッ！？マグゥ、マグッ！』

マグマラシはモロにゴッドバードを受けてしまったが、無理やり軌道修正されたゴッドバードは威力もない。

タクヤ「マグマラシ、火炎放射でフィニッシュ！」

マグマラシ『マァ、グゥゥゥゥゥ！！！』

ヨルノズク『クルッ！？クル……ルルル……ル……』

坊主「ヨルノズク、戦闘不能、マグマラシの勝ち！よって勝者、挑戦者タクヤ！！」

タクヤ「やったぜ！マグマラシ、ありがとう！！」

マグマラシ『マグマグッ♪』

コトネ「タクヤ、すごいよ！」

カズナリ「素晴らしいバトルでした！」

師匠「戻れ、ヨルノズク！ゆっくり休め。いやぁ、お主タクヤと言ったな？素晴らしいバトルじゃった。良いトレーナーを目指せよ？」

タクヤ「はいっ！」

お師匠様に勝ったタクヤ。コトネも同じくバトルしたが、チコリータ、マリルが戦闘不能になりながらも、「高速蟹の恐怖」の再来で勝った。いよいよ明日はキキョウジムだ！！！

To Be Continued...

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　初ジムバトル！！　タクヤｖｓハヤト！！

タクヤ「すみません、ジム戦しに来ました」
ハヤト「挑戦者（チャレンジャー）は君かい？俺はジムリーダーのハヤト。鳥ポケモン使いさ」
タクヤ「ハヤトさん、ジム戦は俺だけじゃなくて、後ろのコトネもです」
コトネ「私もお願いします」
ハヤト「そうか。じゃあどちらから先にする？」
タクヤ「俺から行きましょう」
ハヤト「そうか。じゃあバトルフィールドの方に行こうか」
タクヤ「はい」

バトルフィールドに移動した俺たち。鳥ポケモンは飛べるから気を付けないとな。

コトネ「頑張ってって事ね」
カズナリ「頑張ってください、タクヤさん」
タクヤ「おうよ」
ハヤト「それじゃあはじめようか」

いよいよ初のジムバトル。楽しみだな。

審判「これより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者（チャレンジャー）、タマムシシティのタクヤのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。道具の使用は認められません」
タクヤ「本気でいきますよ？」
ハヤト「ああ、本気で来い！」
タクヤ「行けっ、ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！』
ハヤト「君のポケモンはハッサムか。それなら、行け、ピジョット！」
ピジョット『ピジョーーーーッッッ！！！！！』
コトネ「あれがピジョット……」
カズナリ「すごく強そうですね」

カズナリはポケモン図鑑を取り出し、検索した。

ピジョット　鳥ポケモン。ピジョンの進化系。発達した　胸の　筋肉は、軽く　翔いただけで　大風を　起こせるほどである。

審判「先行は挑戦者（チャレンジャー）から。それでは、バトルスタート！！」
タクヤ「いくぜハッサム！！高速移動からの影分身！！」
ハッサム『ハッサム！ハッサムハッサム！！』
コトネ「タクヤのハッサム、すごく速い。それに分身の数もすごい」
カズナリ「さすがタクヤさんのポケモン。よく育てられているよ」
ピジョット『ピジョッ！？ピジョッ、ピジョッ！』
ハヤト「落ち着けピジョット！分身をすべて巻き込むように風おこし！！」
ピジョット『ピジョーーーーッッッ！！！』
タクヤ「甘い！ハッサム、飛翔！！」
ハッサム『ハッサム！！！！！』

ハッサムは高速で羽を翔かせ、分身全てが飛翔した。

タクヤ「行くぜ！バレットパンチからの燕返し！！！」
ハッサム『ハッサム！ハッサム！ハッサハッサム！！』
ハヤト「速い！？ピジョット、よけろ！」
タクヤ「もう遅い！ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！！ハッサ、ハッサ、ハッサム！！！』

ハッサムはピジョットに突進し、弾丸のような連続パンチでピジョットを地上に撃ち落としたあと、馬乗りになってハサミで数回斬撃を繰り返す。

ピジョット『ピジョッ！』

ハヤト「ピジョット、抜け出してフェザーダンスからの羽休め！」

ピジョット『ピジョピジョピジョッ！！！ピジョ、ピジョ。』

タクヤ「回復技ですか……。しかもフェザーダンスで攻撃を下げるのはいい判断だと思う。だが、まだ甘い！ハッサム、剣の舞三連発！」

ハッサム『ハッサム、ハッサム、ハッサム！！！！』

ハッサムが力強く舞う。剣のような影が見えたかと思うと、ハッサムの攻撃が大きく上昇した。

ハヤト「こっちは勝負に出るぞ、ピジョット！ブレイブバード！！！」

ピジョット『ピジョーーーーーーーーーッッッッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！』

ピジョットが羽を小さく折りたたみ、低空を高速で飛行していた。大きなダメージを自分が負うかわりに、相手にも大ダメージを与える技。それがブレイブバードである。

ハッサム「行け！ピジョット！！」

ピジョット『ピジョーーーーーーッッッッッ！！！！！！』

タクヤ「だったらこっちも勝負に出るぜ！ハッサム、ダブルアタック！！！」

ハッサム『ハッサム！ハッサム！』
コトネ「いよいよ勝負に出るって事ね！」
カズナリ「頑張ってくださいタクヤさん！」
タクヤ，ハヤト「うおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！」
ピジョット『ピジョーーーーーーーーーーッッッッッッッ！！！！！！』
ハッサム『ハッサ、ハッサ、ハッサム！！！！！！！！！！』

ズドォォォォォォォォォォン！！！と大きな爆発が巻き起こる。爆風による気振りが消えたとき、そこに立っていたのは……

ピジョット『ピジョッ……』
ハッサム『ハッサ……』

なんと両方立っていた。どちらもキツそうだ。

ハヤト「次で決まりそうだね」
タクヤ「そうですね」
ハヤト「じゃあ行くぞピジョット、翼で打つ！」
タクヤ「ハッサム、バレットパンチ！」
ハッサム『ハッサムッッ！！！！』
ピジョット『ピジョッ！　ピ……ジョ……』

技を出そうと、ピジョットが構えたところで倒れてしまった。

審判「ピジョット、戦闘不能。ハッサムの勝ち。よって勝者、挑戦者（チャレンジャー）タマムシシティのタクヤ」
タクヤ「よっしゃー！！！！勝ったぞハッサム！！！！」
ハッサム『ハッサム！！！ハッサムハッサム！！！』

俺はハッサムに抱きついた。

タクヤ「ありがとうハッサム」
ハッサム『ハッサム♪』
ハヤト「戻れピジョット。よく頑張ったな。おめでとう、タクヤ君。これは勝者の証、ウィングバッジだ。貰ってくれ」
タクヤ「よっしゃ！ウィングバッジ、ゲット！！！」
ハッサム『ハッサム！！！』
コトネ「タクヤ、おめでとうって事ね！」
カズナリ「おめでとうございます、タクヤさん」
タクヤ「ああ、ありがとう。コトネ、次はいよいよお前のジム戦だ。はじめてのジム戦頑張れよ！！」
コトネ「うん！」
ハヤト「そしたら、ポケモンを回復したらすぐにはじめようか」
コトネ「はい！お願いします、ハヤトさん」

ハヤトとのジム戦に勝利することができたタクヤ。次はいよいよコトネのジム戦。コトネはハヤトに勝つことができるのか。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　コトネのジムバトルと繋がりの洞窟

ハヤト「コトネちゃん、回復も終わったからすぐにジム戦を始めようか」
コトネ「よーしっ、頑張るって事ね」
カズナリ「頑張れ、コトネ」
タクヤ「俺も応援してるぜ」

　ここはキキョウシティポケモンセンター。キキョウシティジムリーダー、ハヤトのポケモンの回復も終わり、ついにコトネの初ジムバトルが始まろうとしていた。

審判「ではこれより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者（チャレンジャー）コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。ポケモンが先に倒れたほうが負けとなります。なお、道具の使用は認められません」
ハヤト「タクヤ君には負けたけど、次はそうはいかないよ！行けっ、ピジョット！」
ピジョット『ピジョーーーッッ！！』
コトネ「だったら私も本気で行くって事ね。出てきて、マリル！！」
マリル『リルル～』
審判「それでは、バトルスタート！」
コトネ「マリル、水鉄砲！」
マリル『リィ、ルーーーーー！！！！』
ハヤト「かわして翼で打つ！」
ピジョット『ピジョーーーッッ！！』
コトネ「マリル、ジャンプ！そこから体当たり！」
マリル『リルッ！リルーーッ！！！』
ピジョット『ピジョッ！？ピジョーーーッッ！！』

マリルの体当たりが直撃したピジョットは大きくのけぞった。あのマリル、パワーがすごいな。

コトネ「そのままアクアテール！」
マリル『リルッ！！！！』
ピジョット『ピジョッ！！！』
ハヤト「ピジョット、羽休め」
コトネ「させないって事ね。マリル、水鉄砲連発！！」
マリル『リィ、ルーッ！ルッ！ルッ！ルーッ！』
ピジョット『ピジョーーーッ！！！！！！！！』
ハヤト「なかなかやるね、コトネちゃん！ピジョット、ブレイブバード！」
ピジョット『ピジョーーーーーーーーッッッッッッッッ！！！！！！』
コトネ「この時を待っていたのよ！マリル、タイミングを合わせて！」
マリル『リルッ！』

そこにブレイブバード状態のピジョットが接近する。

コトネ「今よ！地面に向かって水鉄砲！！」
マリル『リィ、ルーーーーーッッッ！！！！！』

水鉄砲の勢いで上空に飛び上がるマリル。その水柱にピジョットが突っ込んだ。なおも水鉄砲を続けている。

ピジョット『ピジョッ！？ピジョッ！ピジョピジョッ！ピジョーッ！』
ハヤト「抜け出せピジョット！」
コトネ「止めのアクアテール！」

マリル『リィ、ルーーーーーッッッ！！！！！！』
ピジョット『ピジョッ！ピジョーーーッッ！！！！ピ……ジョ……』
審判「ピジョット、戦闘不能。マリルの勝ち！よって勝者、挑戦者（チャレンジャー）コトネ」
コトネ「やったーーーー！！！！」
タクヤ「スゲェぞコトネ！」
カズナリ「やりましたね、コトネ！」
ハヤト「タクヤ君とのバトルの間にブレイブバードの弱点を見抜かれたのかな？」
コトネ「はい。急に止まれないからその先に攻撃を展開しておけば勝手に突っ込んでくると思ったんです！」
ハヤト「何はともあれ、勝者の証のウィングバッジだ！」
コトネ「ウィングバッジ、ゲットって事ね！」
マリル『リルル～♪』

ジム戦を終えたタクヤ一行は、ヒワダタウンにつながる繋がりの洞窟に来ていた。

タクヤ「今日は何曜日だっけ？」
コトネ「多分金曜日だったはずよ」
カズナリ「それがどうしたんですか？」
タクヤ「いやー、保護されてるんだけど、ここは金曜日だけラプラスが見られるんだ」
コトネ「ラプラス！？」

ラプラス　乗り物ポケモン。優しい　心の　持ち主。めったに　争わないため、沢山　捕まえられ　数が　減った。

カズナリ「ラプラスって、絶滅危惧のポケモンですよね？」
タクヤ「ああ。まぁ、俺持ってるけど」

コトネ「ええっ！？どうして？」
タクヤ「まぁ、研究職目指してるって言っただろ？その度の時にラプラス保護区に行ったんだけど、管理人と仲良くなってさ、卵をもらったんだ」
コトネ「いいな～、ラプラス」
カズナリ「せめて見に行きましょうよ」
タクヤ「そだな」

つながりの洞窟を通るタクヤたちは、ラプラスを見に行くことになった。目指すは繋がりの洞窟の最下層！

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　ラプラスとロケット団！！

タクヤ「このあたりラプラスが見られるみたいだぞ」

ここは繋がりの洞窟最下層。ラプラスが見られる場所についたはずなんだけど……

コトネ「いないみたいね……」
カズナリ「どうしてだろう……？」
タクヤ「看板もこうしてあるのに」

看板があり、そこには『毎週金曜日、ここにラプラスがやって来ます。保護区なので捕まえないようにしましょう』と書いてある。しかし、ラプラスがいないのだ。

タクヤ「ま、また今度見に来るか」

そんなことを呟いたとき、変な黒い服を着た二人組が話し合っていた。

黒Ａ「ラプラスも捉えたし、ここに用はもう無いな」
黒Ｂ「そうだな。さっさとサカキ様にラプラスを渡そうぜ」

この二人組がラプラスを捕まえたようだ。二人組の近くに、大きなロボットがあった。

コトネ「ねぇねぇ、あの二人組が捕まえたんじゃないの？」ヒソヒソ
カズナリ「そうですね。ラプラスを捉えたとか言ってますし」ヒソヒソ

タクヤ「そうだな。俺が行くからお前らはここに隠れてろ」ヒソヒソ

そんなことを話し合っていたタクヤたち。しかし……

黒A「そこにいるのは誰だ！！」
黒B「我々の活動を見たからには、生きて帰れると思うなよ！！」
タクヤ「マズイ、バレた！クソッ、テメェら。ラプラスを放しやがれ！！」
黒A「誰が放すか！行けっ、クロバット！！」
黒B「そうだそうだ。こいつはサカキ様に渡すのだ！お前も行けっ、マタドガス！」
クロバット『クロバッ！！！』
マタドガス『マータドガース！』
タクヤ「行ってこい、ガブリアス、ハッサム！」
ガブリアス『ガブッ！！！』
ハッサム『ハッサム！！！』

二人組はクロバットとマタドガスを繰り出した。

タクヤ「テメェら、サカキって言ったな！？ということはお前らは、ロケット団か！？」
ロケット団A「バレちゃあしょうがない」
ロケット団B「そう。俺たちはサカキ様のご命令でラプラスを捕まえに来たのだ！」
タクヤ「ほうほう、ロケット団か……。だったら手加減する必要はねぇな！ガブリアス、二人組に向けて逆鱗！ハッサムはシザークロス！」
ロケット団A，B「は？」
ガブリアス『ガブガブガブガブッ！！！！！！！』
ハッサム『ハッサム！！！！！！！』

ロケット団A，B「グハッ！！」
クロバット『クロバッ……』
マタドガス『ま、マァタドガァス……』

クロバットとマタドガスは隅っこでガクブル：（；゛゜'ω゜'）：していた。

ロケット団A「クソッ！」
ロケット団B「こうなったら、マタドガス、煙幕！！」

しかしマタドガスは隅で震えていて何もできない。

タクヤ「さぁ、覚悟はできてんだろぉなぁ？」
ロケット団A「すすすす、スイマセンっしたァ！！！」スライディング土下座
ロケット団B「ラプラスは逃がすので、開放してくださぁい！！！」ジャンピング土下座
タクヤ「ふぅん、じゃあ開放してやる……とでも言うと思ったかぁ？ガブリアス、気絶させろ！」
ガブリアス『ガブッ！！！』
ロケット団A，B「グハッ！」

ロケット団の二人組は気絶してしまった。俺はバッグから穴抜けの紐を取り出し、二人を縛ったあと、ロボットを壊してラプラスを開放した。

ラプラス『キューン！！』
タクヤ「うぉ！」
コトネ「うわー、ラプラスだー！！」
カズナリ「本物は初めて見ました！」

ラプラス『キューン、キューン！！』
タクヤ「やめろよラプラス！」

俺はラプラスにじゃれつかれていた。顔を舐められ、頬に頭をすり寄せられた。

タクヤ「ありがとう、ガブリアス、ハッサム。お前たちは戻れ！」

俺はガブリアスとハッサムをボールに戻した。

タクヤ「じゃあラプラス、俺たちはそろそろ行くよ」
コトネ「そうね。私たちはヒワダタウンでジム戦しなきゃいけないしね」
カズナリ「そろそろ行きましょうか」
ラプラス『キューン、キューン……』

ラプラスは寂しそうにする。しかし保護区のポケモンは捕まえられないのだ。

タクヤ「ゴメンなラプラス。お前は保護区のポケモンだから捕まえたらいけないんだ。だけど、また会いに来るよ」
コトネ「そうね」
カズナリ「そうですね」
ラプラス『キューン？キューンキューン♪』

俺たちはラプラスに別れを告げ、ここを出ようとした。しかし……

タクヤ「ああ、この二人組とそいつらのポケモン忘れてた。おい、マタドガス、クロバット」
マタドガス，クロバット『……！！』ビクッ

タクヤ「そんなに怖がるな。お前たちはどうする？このまま野生に帰るか？」
コトネ「まあ、こんな奴らの手持ちのままより野生に帰ったほうが幸せじゃないの？」
カズナリ「そうですね」
マタドガス『マァタドガァス』スリスリ
コトネ「わっ！」
クロバット『クロバッ』スリスリ
カズナリ「うわっ！」

マタドガスはコトネに、クロバットはカズナリに擦り寄ってきた。

タクヤ「こいつら、お前らと一緒にいたいんじゃないか？」
マタドガス『マタドガァス！』コクコク
クロバット『クロバッ』コクコク

マタドガスとクロバットは頷く。

タクヤ「じゃあ、こいつらがもっているこれがこいつらのボールか。はい、コトネにはマタドガスのボール。カズナリにはクロバットのボールだ」
コトネ「マタドガス、ゲットって事ね！！」
カズナリ「クロバット、ゲットです！！」
マタドガス『マァタドガァ！』
クロバット『クロッ、クロバッ！！』

コトネとカズナリはマタドガスとクロバットをゲットしたあと、ボールに戻した。

タクヤ「それじゃ、ヒワダタウンに行くか」

コトネ「そうね」
カズナリ「そうですね」
タクヤ「おっと、こいつらをヒワダのジュンサーさんに渡さないといけねえな」

俺は縛られたロケット団を担ぎ、歩きだした。

コトネ「よーし、ジム戦頑張るぞーーー！！」
タクヤ「オーーー！！！」
カズナリ「頑張ってください！」

ラプラスをかけてロケット団と戦ったタクヤたちは、新たな仲間、マタドガスとクロバットを加え、次の街、ヒワダタウンに向けて歩きだした。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２　スピードボール！コトネ　キリンリキゲットって事ね！

タクヤ「やっと抜けたー」

俺たちはやっと繋がりの洞窟を抜け、ヒワダタウンに来ていた。

タクヤ「よし、こいつらをジュンサーさんに引き渡すか」
コトネ「そうね」
カズナリ「そうですね」

そう、ラプラスの捕獲をしようとしていたロケット団員二人を引き渡すのだ。

タクヤ「ジュンサーさん！」
ジュンサー「どうしたの？」
タクヤ「こいつら、繋がりの洞窟のラプラス保護区でラプラスを捕まえようとしてたので捕まえました」
ジュンサー「あら、ありがとう。それで、ラプラスは？」
タクヤ「しっかり守りましたよ」
ジュンサー「そう。ご協力感謝します」
タクヤ「はい！」

俺たちはジュンサーさんにロケット団を引渡し、ポケモンセンターで一夜を過ごした。
次の朝、コトネがこんな提案をしてきた。

コトネ「ねえ、ボール職人のガンテツさんのところに行ってみない？」
カズナリ「いいね、それ」

タクヤ「そうだな。俺もぼんぐり渡しておきたいし」

俺たちはガンテツさんの工房に来た。

タクヤ「御免くださーい！」

？「はい？」

タクヤ「おや、ガンテツさんですか？」

ガンテツ「いかにも。ボール作成の依頼かな？」

タクヤ「はい。えっと、この白ぼんぐりとみどぼんぐりで」

ガンテツ「ああ、たしかに受け取ったよ。明日にでも取りに来なさい」

タクヤ「はい」

コトネ「ねえねえ、ぼんぐりってどんなボールになるの？」

カズナリ「それは僕も気になります」

コトネとカズナリがそんなことを聞いてきた。

タクヤ「それは、白ぼんぐりが素早いポケモンを捕まえやすいスピードボール。きぼんぐりが月の石で進化するポケモンを捕まえやすいムーンボール。赤ぼんぐりがレベルの低いポケモンを捕まえやすいレベルボール。青ぼんぐりが釣ったポケモンを捕まえやすいルアーボール。みどぼんぐりが捕まえたポケモンが懐きやすくなるフレンドボール。そして、黒ぼんぐりが体重の重いポケモンを捕まえやすいヘビーボールだ」

ガンテツ「よく知っているようじゃな。どうじゃ？これをあげよう。ひとり一個ずつヘビーボール、スピードボール、ルアーボールじゃ」

コトネ「じゃあ私スピードボール」

カズナリ「僕はルアーボールにします」

タクヤ「俺はヘビーボールで。ガンテツさん、ありがとうございます」

ガンテツ「大事に使いなさい」
コトネ「よーし、早速ゲットしに行こう！」

コトネは走り出した。俺たちも追いかけていく。ついた先は、繋がりの洞窟の出入口のすぐそこである、三十三番道路だ。

タクヤ「待てよコトネ！」
カズナリ「待ってよー、ってうわっ！」

草むらから飛び出してきたのは、キリンリキだった。

コトネ「キリンリキだ！」

コトネは図鑑を使う。

キリンリキ　首長ポケモン。尻尾にも　小さな　脳がある。　近寄ると　臭いに　反応して　噛み付いて　くるので　注意。

タクヤ「本来三十三番道路には居ないはずなのに」
カズナリ「えっ！？そしたら誰かが捨てたポケモンだろうか」
コトネ「どっちでもいいって事ね。行けっ、チコリータ！」
チコリータ『チッコ！』
キリンリキ『リキッ！』

キリンリキはダブルアタックを放つ。

コトネ「チコリータ、かわして葉っぱカッター」
チコリータ『チコッ！チッコ！！！』
キリンリキ『リキィーーーーー！！！！』

キリンリキは葉っぱカッターを受け倒れたが、再び立ち上がった。

タクヤ「いい根性だな」
カズナリ「キリンリキのスピードはなかなかなものです。これは注意が必要ですよ」
コトネ「チコリータ、ツルの鞭で地面に叩きつけて！！」
チコリータ『ティッコーーー！！！！』
キリンリキ『リッキーーッ！！！リキ……リ……キ……』
コトネ「今よ、モンスターボール！」

モンスターボールにキリンリキが収まる。一回、二回と揺れ、スイッチが点滅する。しかし……

キリンリキ『リッキィ！』
コトネ「ああ！捕まえたと思ったのに！」
タクヤ「コトネ、さっき貰ったスピードボールを使え！」
コトネ「それがあった！行けっ、スピードボール！！」

今度はスピードボールにキリンリキが収まる。一回、二回、三回と揺れる。そしてパチンッ、と音が鳴り、完全にボールに収まった。

コトネ「ッッッ！キリンリキ、ゲットって事ね！！！」
チコリータ『チコリッ！チコ！！』
タクヤ「ガンテツさんのボールはすごいだろ？」
カズナリ「ほんとにすごいよ。モンスターボールでダメだったのを捕まえるなんて」
コトネ「ありがとう、チコリータ。よーし、キリンリキも加えて、ジム戦頑張るぞー！！！」
タクヤ「俺も頑張るぜ！！」

コトネは、新たな仲間キリンリキを加え、手持ちポケモンは5体となった。次は、ヒワダジム。果たして、タクヤとコトネはジムリーダーに勝つことはできるのか！

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３　ヒワダジム　ヌケニンとタクヤ！！

タクヤ「御免くださーい！ジムリーダーのツクシさん、いますかー！？」
コトネ「ここが本当にジム？どちらかと言えば植物園のような感じがするんだけど」
カズナリ「ガイドブックには確かにここって書いてますね」

そう、ここはヒワダジム。だが内装は小さな植物園のような感じなのだ。

？「誰だい君たちは？」
タクヤ「挑戦者（チャレンジャー）です。貴方はジムリーダーのツクシさん、ですね？」
ツクシ「そうだよ。じゃあ、ジム戦ってことでいいんだね？」
コトネ「私も挑戦者（チャレンジャー）です」
ツクシ「そうか。だったらそちらが先にするか決めてくれるかな？」
タクヤ「コトネ、今回も俺が先に行っていいか？」
コトネ「いいよ、私があとでも」
ツクシ「じゃあ早速はじめようか」

いよいよ俺のジム戦。今回は３ｏｎ３だが、一体で３タテするつもりだ。なぜなら、アイツを連れてきたからだ。

審判「それでは、ジムリーダーツクシ対、挑戦者（チャレンジャー）タクヤのバトルを始めます！道具の使用は禁止。使用ポケモンは３体。どちらかが３体全てを失ったところで終了とします！なお、交代は挑戦者（チャレンジャー）のみ認められます。それでは、始め！」
ツクシ「じゃあ僕から行くよ！行けっ、虫ポケモンの静かなる戦士！」

イトマル『イトォ～』
タクヤ「ツクシさん。悪いですが今回の勝負、俺のポケモンを一体も倒せずに終わるでしょう」
ツクシ「何を言ってるんだい？そんなわけ――――」
タクヤ「――――あるんですよ。虫ポケ使いである貴方なら、これが何かわかるでしょう？行けっ、俺の切り札っ！」
ヌケニン『ヌケ～』
ツクシ「ッ！？そのポケモンは！」
タクヤ「そう、ヌケニンですよ。俺の知る限り、あなたのポケモンはイトマル、トランセル、ストライク。だが、あなたのストトライクは燕返しも、翼で打つも覚えていない。イトマルもトランセルもこいつを突破する技はない。貴方はもう詰んだんですよ」
ツクシ「たしかに、詰んだかもしれないね。だけど、勝負は最後までわからない！」
タクヤ「いいでしょう。いくぞヌケニン！」
ヌケニン『ヌケ～！』
審判「それでは、始めっ！」

その頃、コトネとカズナリは……

コトネ「何、あのポケモン！？」
カズナリ「あのポケモンって、もしかして……！？」

コトネは図鑑を取り出し、調べた。

ヌケニン　抜け殻ポケモン。ツチニンの進化系。羽を　動かさずに　飛んでいる　不思議な　ポケモン。背中の　割れ目を　覗くと　魂を　抜き取られる　らしい。

コトネ「ヌケニン？」

カズナリ「聞いたことがある。進化条件が特殊なツチニンの進化系がいるって。確かそのポケモンは、効果抜群以外の技は当たらない！」
コトネ「なにそれ！？そんなのって、反則じゃない！」

そんなヌケニン談義をする二人だった。
そして、タクヤとツクシのジム戦が始まった。

タクヤ「ヌケニン、剣の舞からの身代わり！そして高速移動！」
ヌケニン『ヌケェェェェ！！！』
ツクシ「イトマル、糸を吐く！」
イトマル『イトォ！』

イトマルはこちらの素早さを下げようとする。だが……

タクヤ「ヌケニン、かわして燕返し！」
ヌケニン『ヌケッ！ヌケェ！』
ツクシ「速い！？かわして、イトマル！」
イトマル『イトッ！？イトォォォ！』
審判「イトマル、戦闘不能！ヌケニンの勝ち！」
コトネ「一撃で相手を倒した！！」
ツクシ「強いね、そのヌケニンは。これは本当に詰んだかもしれないよ。僕はまだ、トランセルを信じている。進化すれば対抗できるからね。行けっ、虫ポケモンの誇り高き戦士！」
トランセル『トランセルッ！！』
ツクシ「ひたすら固くなって耐えるんだ！」
タクヤ「固くなって耐える戦法か……。だが、物理防御を上げたところで、特殊技に効果はない！ヌケニン、影分身からシャドーボール連弾！」
ヌケニン『ヌケヌケヌケヌケヌケヌケヌケヌケ！！！！！』

トランセル『トランセッ！！！トラ……ン……セ……』
審判「トランセル、戦闘不能！ヌケニンの勝ち！」

さらに二体目を倒した。次はストライク。燕返しや翼で打つを途中で覚えることに注意すれば大丈夫だ。

コトネ「すごい！あっという間に二体倒しちゃった！」
カズナリ「おそらく、効果抜群の技を覚えるバタフリーに進化するまで耐えようとしてたのでしょう」
ツクシ「このポケモンが途中で飛行タイプの技を覚えなかったら完全に終わりだ！行けっ、華麗なる虫ポケモンの戦士！」
タクヤ「いよいよ切り札のお出ましか……。気をつけろ、ヌケニン！」
ヌケニン『ヌケッ！』
ストライク『ストライッ！！！』
ツクシ「ストライク、影分身！」
ストライク『ストライッ！！！』

ストライクが何体にも増える。だが……

タクヤ「小細工は通用しねぇんだよ。ヌケニン、シャドークロー！」
ヌケニン『ヌケッ！！！』
ストライク『ストライック！！！スト……ストライッ！』
タクヤ「まだ耐えるか……。だが、次で終わりだ！ヌケニン、燕返し！」
ツクシ「ストライクっ！」

その時、ストライクの翼が光りだし、ヌケニンに突進し始めた。
タクヤ「ここの土壇場で翼で打つを覚えるか……。構うなヌケニン

！そのまま突っ込め！」
ツクシ「ストライク、頑張って！翼で打つ！」
ストライク『ストライッ！！！！！！』
ヌケニン『ヌケェェェェェ！！！』

そこで、ストライクの翼で打つが、ヌケニンに、ヒットした。

ツクシ「やった、ヌケニンを倒した！」

だがそこで俺は、ニヤリと笑い、こう言った。

タクヤ「ヌケニン、地中から燕返し！」
ツクシ「えっ！」
ヌケニン『ヌッケェ！』
ストライク『ストライッ！ス……ト……』
審判「ストライク、戦闘不能！ヌケニンの勝ち！よって勝者、挑戦者（チャレンジャー）タクヤ！」
ツクシ「なんでヌケニンは倒れていなかったんだい？」
タクヤ「俺の最初の支持を忘れたのかい？身代わりを使って、本体は穴を掘るを使わせていたんだよ」
ツクシ「そうだったんだ。戻れストライク、お前はよくやった。これが勝った証、インセクトバッジだ。大事にしてね」
タクヤ「おうよ。ヌケニン、ありがとな」

俺はヌケニンに抱きつく。するとヌケニンは照れたように鳴いた。

コトネ「次はいよいよ私の番ね。よーし、タクヤに負けないくらい頑張るぞ！」

見事、ジムリーダーツクシを下し、インセクトバッジを手に入れ

たタクヤ。次はコトネのジム戦。はてさて、どうなることやら。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４　コトネｖｓツクシ！　激突ヒワダジム！！

ツクシ「さて、回復も終わったし、次はコトネ、君とのジム戦をはじめよう」
コトネ「はい！」

俺とのジム戦で傷ついたポケモンの回復も終わり、コトネとツクシのジム戦が始まろうとしていた。

タクヤ「コトネ、負けんじゃねぇぞ」
カズナリ「頑張れ、コトネ」
コトネ「勿論！」

コイツの手持ちは最初に貰ったチコリータ、下から持ってたマリル、釣ったキングラー、繋がりの洞窟でロケット団が残したマタドガス、さっき捕まえたキリンリキだ。まぁ、使用するのはマリル、キングラー、マタドガスあたりが定石だろう。
あ、勿論マタドガスとキリンリキは６ｖにしてますけどね。

審判「これより、ジムリーダーのツクシ対挑戦者（チャレンジャー）コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは三体！どちらかが先にすべて失ったとき、バトル終了とします！ポケモンの交代は挑戦者（チャレンジャー）のみとします！なお、道具の使用は認められません！」
ツクシ「まずは僕からだ。行けっ、虫ポケモンの静かなる戦士！」
イトマル『イトォ』

ツクシが出したのは、さっき使用したイトマル。対するコトネは、
コトネ「行けっ、キリンリキ」

キリンリキ『リキ～！』

キリンリキだ。エスパーは虫に弱いのに。

タクヤ「キリンリキ！？」
カズナリ「エスパータイプは虫に弱いはずなのに」
ツクシ「虫ポケモン相手にエスパーで来るなんて、どうかしてるよ」
審判「それでは、始め！」
ツクシ「イトマル、糸を吐く！」
イトマル『イトォ！』

イトマルは糸を吐く。対するキリンリキは、

キリンリキ『リッキィ～！』

コトネは技を知らないから指示をだし遅れている。しかしキリンリキは勝手に行動し、エスパーの力で糸を博を跳ね返した。って、あれは！？

ツクシ「サイコキネシス！？なんでそんな技を！？」
イトマル『イ、イトォ……』
ツクシ「ああッ、イトマル！」

イトマルは自分の糸を受けてしまった。
そしてコトネがキリンリキの使える技を調べると、サイコキネシス、噛み砕く、ダブルアタック、高速移動、シャドーボールと出てきた。なんというオーバースペック。

コトネ「キリンリキ、噛み砕く！」
キリンリキ『リィッキィ～！！！』

キリンリキは後ろを向くと、しっぽの頭でイトマルに噛み付いた。イトマルは自分の糸のせいでかわせなかった。イトマルはそれだけで戦闘不能に陥った。

タクヤ「すげぇ、コトネのキリンリキ」
カズナリ「噛み砕く一撃でイトマルを倒すなんて……」
ツクシ「ありがとうイトマル、ゆっくり休んでて。コトネ、君はやるね。次はこいつだ、虫ポケモンの誇り高き戦士！」
トランセル『トランセルッ！！』
ツクシ「トランセル、固くなる。そこから体当たりだ！」
コトネ「かわして！」

トランセルは固くなって強度を上げる。そして、眼前から消え去った。

コトネ「消えた！？」
キリンリキ『リキッ！？リキリキ！？リッキィ〜！！』

消えたと思ったら後ろから体当たりを受け、キリンリキは吹っ飛んだ。

ツクシ「消えたんじゃなくて、スピードで攪乱しているだけだよ。トランセル、連続で体当たり」
コトネ「戻ってキリンリキ」
ツクシ「いい判断だね。さて、次は何を出す？」
コトネ「行けっ、マタドガス！」
マタドガス『マァタドガァ……』
タクヤ「あのマタドガス、どこまでやれるか見ものだな」

ロケット団が置いていったマタドガスだ。
コトネは図鑑でマタドガスの技を調べた
マタドガス　使える技は、ダブルアタック、ヘドロ爆弾、大爆発、道連れ、毒々、シャドーボール、煙幕。
おおう、これもオーバースペック……
ツクシ「マタドガスか……。トランセル、また固くなるをして体当たり！」
トランセル『トランセッ！』
コトネ「マタドガス、煙幕！」
マタドガス『マァタドガァス』
ツクシ「煙幕か……。気をつけろ、トランセル」
コトネ「マタドガス、横回転しながらヘドロ爆弾」
ツクシ「何っ！？」
マタドガス『マァタドガァス』
マタドガスは回転で発生した風圧で煙幕を吹き飛ばす。そこにあったのはヘドロまみれのトランセルだった。
ツクシ「ああっ、トランセルっ！！」
審判「トランセル、戦闘不能！マタドガスの勝ち！」
コトネ「やったぁ、マタドガスありがとう！」
マタドガス『マタドガァス』
ツクシ「本当に君はすごいね。次はこいつ、倒せるかな？行けっ華麗なる虫ポケモンの戦士！」
ストライク『ストライック！』
コトネ「一旦戻って、マタドガス。行けっ、キリンリキ！」
キリンリキ『リッキィ！』

コトネはマタドガスを戻し、キリンリキを繰り出した。
タクヤ「ストライクは強敵だぞ……」
カズナリ「いくらキリンリキでも勝てるかどうか……」
コトネ「キリンリキ、サイコキネシス！」

キリンリキはサイコキネシスを放つ。しかし……
ツクシ「影分身！そこから剣の舞から電光石火。そして連続斬り！」
ストライク『ストライッ』

影分身でサイコキネシスは不発に終わり、剣の舞で攻撃力を上げられてしまった。さらに電光石火で接近されて連続斬りをされまくる。

キリンリキ『リキッ、リキッ！』
タクヤ「連続斬りは当てる度に威力が上がる。さらにストライクの特性テクニシャンで威力が上がっている。これは戦闘不能だな」

思ったとおり、キリンリキは戦闘不能となってしまった。

コトネ「次、行けっマリル！」
マリル『リルル～』
ツクシ「このまま押し切るよ、電光石火から連続斬り！」

マリルも同じく連撃を受ける。

タクヤ「同じ手にはまってどうするんだ！」
カズナリ「マリルが危ない！」

コトネ「マリル、水鉄砲！」
マリル『リルッ、リルッ』

しかし連撃から抜け出せないマリルは、攻撃できない。

コトネ「マリル、抜け出して！」
マリル『リルゥ……』
コトネ「ああっ、マリル！」

マリルも戦闘不能になってしまった。絶体絶命の大ピンチである。

ツクシ「さて、君の最後のポケモンはマタドガスだ。さて、どうする？」

絶体絶命の大ピンチのコトネ。残されるポケモンは一体ずつ。ツクシはストライク。コトネはマタドガス。どちらも危うい状況になってきた。

タクヤ「ツクシはストライク一体。対するコトネはマタドガス一体。こりゃどちらも後がねぇな」
カズナリ「コトネ、頑張れ！」
コトネ「行けっ、マタドガス！」
マタドガス『マァタドガァ』

コトネは最後のポケモン、マタドガスを繰り出した。

コトネ「マタドガス、シャドーボール！」
マタドガス『ドガァ！』
ツクシ「ストライク、切り裂くでシャドーボールを斬れ！」
ストライク『ストライッ！』

なんとストライクは、飛び上がってシャドーボールをまっぷたつに斬ってしまった。

コトネ「シャドーボールを斬った！？マタドガス、煙幕！」

マタドガス『ドガァァァァァァ……』

煙幕で辺りが多い尽くされる。だが、ツクシは同様を見せなかった。

ツクシ「剣の舞で吹き飛ばせ！」

ストライク『ストライク！』

ストライクは高速回転し、巻き起こった風で煙幕を吹き飛ばしてしまう。

コトネ「マタドガス、上昇して！」

ツクシ「追え、ストライク！翼で打つ！」

マタドガスは上昇したが、ストライクのほうが速かった。ストライクも飛び上がり、強烈な翼で打つで迎撃されてしまった。

コトネ「もう打つ手はないの……？」

コトネが崩れ落ちそうになったとき、マタドガスの口から炎が上がり始めた。

タクヤ「あれは、火炎放射！？しかもかなり強力そうな感じだぞ！？」

コトネ「マタドガス。あなた火炎放射を覚えたのね！」

マタドガス『ドガァァァァァ！！！』

ドガースは火炎放射を発射した。しかも、上空からフィールド全体に降り注ぐように。

ストライク『ス、スト……』

ツクシ「ああっ、ストライク！」

ストライクは上空から降り注ぐ火炎放射を被弾してしまい、黒こげになって倒れてしまった。

審判「ストライク、戦闘不能！マタドガスの勝ち！よって勝者、挑戦者（チャレンジャー）コトネ！」

コトネ「やった、勝ったー！！！ありがとうマタドガス！！！」

マタドガス『／／／』

ツクシ「すごかったよ君のマタドガス。まさかあそこで火炎放射を覚えるなんて。しかも普通の火炎放射なら対抗策はあったんだけど、上から降ってくるのは防ぎ様がなかったよ。はい、インセクトバッジ」

コトネ「インセクトバッジ、ゲットって事ね！！」

マタドガス『マァタドガァス！』

見事ヒワダジム、ジムリーダーのツクシに勝利したコトネ。次のジムに向けて、タクヤたちの旅はまだまだ続く。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５　到着コガネシティ！　ドククラゲとカズナリ！！（前書き

「Ｅｐｉｓｏｄｅ１４　コトネｖｓツクシ！　激突ヒワダジム！！」
の内容を少し変更させていただきました
ぜひ読んでおいてください

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５　到着コガネシティ！　ドククラゲとカズナリ！！

ヒワダのジム戦も終わり、コガネシティに向かっている途中、一成のポケギアに電話が掛かってきた。

カズナリ「もしもし」
？［もしもし、カズナリか？］
カズナリ「父さん？どうしたの？」
カズナリ父［次のジョウトフェスタの場所が決まったよ。シンオウ地方だ］
カズナリ「ジョウトフェスタの？わかった。どこで待ち合わせ？」
カズナリ父［お前は今どこにいる？］
カズナリ「コガネシティに向かっている途中。もうすぐコガネシティにつくよ」
カズナリ父［ちょうど良かった。今コガネシティにいるんだ。デパートの屋上に来てくれ］
カズナリ「うん、わかったよ。それじゃあ」

カズナリの電話も終わり、再び歩きだした。

タクヤ「そうだ、カズナリ。ジョウトフェスタって？」

俺は死ぬ前にアニメを観て知っているが、聞いとかないと怪しまれそうなので一応聞いておいた。

コトネ「私たち、各地でジョウトをＰＲしてるの」
カズナリ「そう。今回の行き先はシンオウ地方ってわけ」
タクヤ「そうか。俺も行きてぇな、シンオウ地方」
コトネ「私たちについてくれば？」

タクヤ「いいのか？まぁ、ダメだっつっても俺のプテラやボーマンダに乗って行こうと思ってるけど」
カズナリ「まぁ、父さんに聞いてみるよ」
タクヤ「さんきゅー」
コトネ「それじゃ、さっさとコガネシティに行きましょ」
タクヤ，カズナリ「ああ（うん）」

そんなことを話しながら、コガネシティに向かった。

タクヤ「ここがコガネシティか……。ジム戦どうする？」
カズナリ「帰ってきてからでいいよ」
コトネ「そうね。さっさとデパートに行きましょ」
タクヤ「おう。っと、その前に手持ち変更しておこうかな。シンオウに俺に相対できるトレーナーがいないか探してみたいから本気の手持ちで行かせてもらうよ」
コトネ「タクヤの本気の手持ち！？見てみたい！」
カズナリ「僕も興味あるよ」

俺は転送装置を取り出し、手持ちをテッカニン、メタグロス、ボーマンダ、スターミー、ドサイドン、ゲンガーに変更した。

カズナリ「強そうなポケモンばっかりですね」
コトネ「強くなったらこのポケモンたちとバトルしてみたいな」
タクヤ「おう、待ってるぜ」

そんな話をしているうちに、デパートの屋上についたみたいだ。
そこにはカズナリに少し似た感じのオジサンがいた。

カズナリ「父さん」
カズナリ父「カズナリ、コトネ、久しぶりだね。そちらの人は？」

タクヤ「ああ、俺、タクヤです。カズナリ、コトネと一緒に旅させてもらってる者です」
カズナリ父「そうか。うちのカズナリがお世話になってるみたいだね。そしてカズナリ、旅の調子は？」
カズナリ「タクヤさんがベテランだから色々教えてもらってるよ」
カズナリ父「そうか」
コトネ「おじさん、ジョウトフェスタ、タクヤも連れていっていいですか？」
カズナリ父「もちろんだよ。よろしく、タクヤ君」
タクヤ「はい、よろしくお願いします。出発はいつになるんですか？」
カズナリ「明日の早朝からだよ。コガネシティの西の海岸に飛行場があるから、そこから出る飛行艇でシンオウに行く」
タクヤ「そっすか。じゃあ、俺ちょっと外行ってきますんで、用があれば俺のポケギアに電話してください」

そう言って、カズナリの父さんのポケギアに、俺のを登録しておいた。
俺はデパートから外に出て、釣りを始めた。
タクヤ「シンオウでジョウトフェスタ、か。サトシとバトルしてぇな……」
そんなことを呟く俺。やっぱ光厨(ピカチュウ)使いと名高いサトシとポケモンバトルをするのは、俺の夢だったのである。
そんなこんなで、釣竿にポケモンがかかったようである。
タクヤ「さって、何が連れたかなっと」
俺は思い切り釣竿を引いた。そこにかかっていたのは、ドククラ

ゲであった。

ドククラゲ『ドクドク……』
タクヤ「ドククラゲか……。よしっ行け、ボーマンダ！」
ボーマンダ『マンダ！』
タクヤ「まずは、ドラゴンクロー！」
ボーマンダ『マンダ！』

ボーマンダの、竜の力を込めた爪による一撃が放たれ、ドククラゲにクリーンヒット。吹っ飛ばされたが、ドククラゲは触手を集め、冷気の力を込め始めた。

タクヤ「不味っ、冷凍ビームか！ボーマンダ、急上昇！」
ボーマンダ『マンダ！マンダ！』
ドククラゲ『ドー、クー！！！』

ボーマンダは間一髪避ける。長期戦は危険だな。
そんな時、ポケギアに電話が掛かってくる。

タクヤ「こんな時にかよ！ボーマンダ、思念の頭突き！もしもし？」
ボーマンダ『マンダ！！！』
カズナリ［もしもしタクヤさん？ちょっといいですか？］
タクヤ「悪い、今取り込み中だ。これ見りゃわかるだろ？」

俺はポケギアのカメラ部分をドククラゲとボーマンダに向ける。
そこにはボーマンダの思念の頭突きがドククラゲに直撃するところだった。

カズナリ［ドククラゲ！？釣りでもしてたんですか！？］
タクヤ「ああ！ボーマンダ、噛み砕く！」

ボーマンダ『マンダ！』

ボーマンダはドククラゲに噛み付いた。ドククラゲは痛がり、そのまま冷凍ビームをはなとうとする。

タクヤ「ボーマンダ、急上昇して上空からドククラゲを地面に叩きつけろ！カズナリ、後でかけ直す」

カズナリ［わかりました。それじゃあ］

カズナリからの通話を切り、バトルに専念する。ドククラゲは地面に叩きつけられ、目を回していた。

タクヤ「ボーマンダ、もういい戻れ。行けっ、モンスターボール！」

ボーマンダをボールに戻し、ドククラゲに向かってボールを投げる。一回、二回、三回とボールが揺れる。そしてパチンと音が鳴ると、ドククラゲがボールに収まった。

タクヤ「ドククラゲ、ゲット！」

ドククラゲをゲットしたが転送せず、ボールを手にもっている。そして、カズナリに電話をかけ直した。

タクヤ「カズナリ？」

カズナリ［ああ、ドククラゲどうしましたか？］

タクヤ「捕まえたよ。まだ転送せず、ボールは手に持ってるけどね。ほら」

と言ってドククラゲのボールをカズナリに見せた。カズナリはうわぁ、と言って、次に本題に入り出した。

カズナリ［今日の夜、ポケモンセンターのバトルフィールドで、バトルしてください］
タクヤ「はぁ？ま、まぁいいけど。用件はそれだけ？」
カズナリ「はい」
タクヤ「おK。じゃ、またそっちに向かうわ」

と言ってポケギアの電話を切り、デパートの屋上に再び向かった。

タクヤ「ただいま戻りました」
カズナリ父「お疲れ。さっきドククラゲを捕まえたんだって？」
タクヤ「はい。ああ、そのことですが、カズナリ、お前にこのドククラゲ、やるよ」
カズナリ「えっ？」
タクヤ「俺ドククラゲ持ってるんだわ。だから、コトネより手持ちの少ないお前にと思ってね」

そう。今の二人の手持ちは、コトネがチコリータ、キングラー、キリンリキ、マリル、マタドガスの五体。対するカズナリはワニノコ、ゴース、クロバットの三体なのだ。三体じゃ新人として危なっかしい。だからカズナリにあげようというのだ。

タクヤ「と言っても、ドククラゲを加えてもコトネより一体手持ちが少ないんだけどね」
カズナリ「あ、ありがとうございます！」
コトネ「いいなー、カズナリ。まっ、よかったじゃん」
カズナリ父「うちのカズナリのために、ありがとうタクヤ君」
タクヤ「どういたしまして。じゃ、夜のバトル楽しみにしてるよ、カズナリ。俺はまぁ本気は出さない、というより出せないんだけどね」

カズナリ「はい！」

こうして、カズナリの父さんはホテルへ、俺たち三人はポケモンセンターで部屋をとっておいた。

いよいよ夜には、カズナリとのバトルだ。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１６　３ｏｎ３　タクヤｖｓカズナリ！！

ここはポケモンセンターのバトルフィールド。そこには、俺とカズナリが向き合っていた。
俺の手持ちは全てジョーイさんに預け、カズナリのような対新人用の手持ちに変更していた。

タクヤ「それじゃ、カズナリ。３ｏｎ３でいいな？」
カズナリ「はい！」
タクヤ「カズナリの父さんは審判を頼みます」
カズナリ父「わかったよ」
コトネ「どっちも頑張れ！」

俺、カズナリはそれぞれの位置につく。そして、俺はお互いの手持ちを考えていた。

タクヤ（カズナリの手持ちはワニノコ、クロバット、ゴース、そして俺のあげたドククラゲ。ゴース以外は電気に弱い。そして俺のあげたドククラゲはほぼ確実に使ってくると見ていい。そして、ドククラゲは水タイプだからワニノコを使ってくる確率は格段に下がる。よってカズナリの手持ちはクロバット、ゴース、ドククラゲの確率が一番高い。そして俺の手持ち、まず電気タイプの対新人用ポケモン、ルクシオ。これは生前レントラーを育てていた途中のものだ。そして次にゴルバット。最後にユンゲラーだ。どれも最終進化ではないから対新人にはもってこいだ。さて、どうするカズナリ？）

そんな考え事をしてる間に、カズナリの父さんの声が響く。

カズナリ父「それではこれより、カズナリ対タクヤのバトルを行う

！使用ポケモンは三体で交換は自由。どちらかのポケモンがすべて失われたときに試合終了とする。なお、道具の使用は認められない！」
タクヤ「まずはこいつからだ！行けっ、ルクシオ！」
ルクシオ『シオッ！』
コトネ「ルクシオ？」

コトネとカズナリは図鑑を使う。

ルクシオ　電光ポケモン。コリンクの進化系。仲間と尻尾を繋げると、より強力な電撃を爪から出すことができる。

カズナリ「やっぱり電気タイプか。ゴース、お願いします！」
ゴース『ゴースゴース！』
ルクシオ『グルルルルｒｒｒ……』
ゴース『ゴ……ゴース……』

やはりゴースを使ってくるか……。そして、ルクシオの特性威嚇も発動した。さて、何を覚えている？

カズナリ父「先行はカズナリ。それではバトル、スタート！」
カズナリ「行くぞ、ゴース！シャドーボール！」
ゴース『ゴーース！！！』
タクヤ「ルクシオ、かわして威張れ！」
ルクシオ『シオーーーッ！』ドヤァ
ゴース『ゴー！？ゴー！ゴーゴース！』
カズナリ「ゴース、正気に戻って！ゴース！シャドーボール！」

ゴースは混乱してしまい、自分を攻撃したり、変な行動をとってしまう。

タクヤ「ルクシオ、噛みつく！」
ルクシオ『シオッ！』
カズナリ「かわして、ゴース！」

やっと正気に戻ったゴースは、ギリギリのところでかわす。

タクヤ「ルクシオ、そのままアイアンテール！」
ルクシオ『シオーーーッ！！！』
カズナリ「ゴース、交わして目覚めるパワー！」
ゴース『ゴース！！！』

アイアンテールを不規則な動きでかわし、目覚めるパワーをルクシオに当てた。ゴースは６ｖだから目覚めるパワーのタイプは悪だ。

タクヤ「そいつの目覚めるパワー、なかなかの威力のようだな。ルクシオ、雷の牙！」
ルクシオ『シオッ！』
ゴース『ゴースッ！！！！』

雷の牙がクリーンヒット！ゴースは痛がる。そしてルクシオが離れると、ゴースは力なく倒れる。だが、

カズナリ「ゴ、ゴースが光ってる！？」
コトネ「あれは！」
タクヤ「進化の光か！」

もともと捕まえた時のレベルがそこそこあったようで、進化してしまった。

ゴースト『ゴースゴスゴースト！』
カズナリ「ゴーストに進化したんだね！？」
ゴースト『ゴースト！』

ゴーストは振り返り、カズナリに返事をした。
カズナリは図鑑を出す。

ゴースト　ガス状ポケモン。ゴースの進化系。本当に何も見えない暗闇で、ゴーストは静かに獲物を狙っている。
使える技は、シャドーボール、目覚めるパワー、催眠術、シャドーパンチ、悪の波動。

カズナリ「すごいよゴースト。そんな技まで使えるようになったんだね。ゴースト、悪の波動！」

ゴーストは手から禍々しい波動を放つ。ルクシオにクリーンヒットし、ルクシオは倒れてしまった。

カズナリ父「ルクシオ、戦闘不能！ゴーストの勝ち！」
コトネ「カズナリすごい！」
タクヤ「サンキュールクシオ、しっかり休めよ。俺から一本取るたぁ、結構やるみたいだな。だったらこいつを倒せるか？行けっ、ゴルバット！」
ゴルバット『ゴルバッ！！』
カズナリ「このまま行くよ！ゴースト、シャドーパンチ！」
タクヤ「甘い！ゴルバット、シャドーボール！」
ゴルバット『ゴルバッ！』
ゴースト『ゴォォォォォォスト！！！！！！ゴー……』
カズナリ父「ゴースト、戦闘不能！ゴルバットの勝ち！」
カズナリ「ゴーストありがとう、ゆっくり休んで。次はこいつです

！クロバット、お願いします」
タクヤ「来たな、クロバット！」

自分の進化系を見たせいか、ゴルバットは少し身震いした。

カズナリ「クロバット、噛み付く！」
タクヤ「ゴルバット、かわして蜻蛉返り！」

クロバットは持ち前のスピードを生かして接近し、噛み付こうとする。だがゴルバットはギリギリかわして蜻蛉返りを決めた。

タクヤ「よし、サンキューゴルバット。ユンゲラー、頼んだ！」
ユンゲラー『ユン、ゲラァ……』
カズナリ「なっ、ポケモンが交代した！？」
コトネ「何で！？」
タクヤ「蜻蛉返りは攻撃の後にポケモンを交代できるんだよ。ユンゲラー、サイコキネシス！」

ユンゲラーはサイコキネシスでクロバットを捕まえる。効果は抜群なので、クロバットはとても苦しがっているようだ。

カズナリ「抜け出して、クロバット！」
タクヤ「無駄だ！ユンゲラー、思いっきり地面に叩きつけろ！」
ユンゲラー『ユーンゲラァァァ！！！』
クロバット『クロバッ！ク、クロォ……』

その一撃で、クロバットはフラフラになって、飛んでいるのがやっとだった。

カズナリ「クロバット、せめて一撃だけでも！エアスラッシュ！」

タクヤ「ユンゲラー、テレポートでかわしてサイケ光線で止め！」

クロバットのエアスラッシュをユンゲラーはテレポートしようとした。だが、スピードの問題でテレポートを使う前に当たってしまい、怯んだ。

カズナリ「よし、怯んだ！もう一回！」
タクヤ「テレポートでかわせ！そしてサイケ光線！」

またクロバットのエアスラッシュが当たり、怯む。

カズナリ「もう一回！」
タクヤ「サイケ光線！」

またエアスラッシュが当たる。しかし今度は怯まず、サイケ光線がクロバットに当たり、倒れてしまった。

カズナリ父「クロバット、戦闘不能」
ユンゲラー「ユ、ユンゲ、ラァ……」

なんと、ユンゲラーも倒れてしまった。

カズナリ父「クロバット、ユンゲラー、両者戦闘不能！」

そしてお互いのポケモンはあと一体。カズナリはおそらくドククラゲだろう。そしてこっちはゴルバット。お互い勝負はわからなくなってきた。

タクヤ「行けっ、ゴルバット！」
ゴルバット『ゴルバッ！』

カズナリ「ワニノコ、お願いします！」
ワニノコ『ワニワニワニ！！！』
タクヤ「なっ、ワニノコ！？ドククラゲを使うかと思ってたぞ」
カズナリ「ワニノコ、アクアテール！」
ワニノコ『ワニワー！！！』
タクヤ「かわせ、ゴルバット！怒りの前歯！」
ゴルバット『ゴル、バッ！！』
ワニノコ『ワニワー！ワニッ！』

ゴルバットはアクアテールをかわし、ワニノコに怒りの前歯がヒットする。

カズナリ「水鉄砲！」
ワニノコ『ワーニャー！』
タクヤ「翼で打つで打ち返せ！」
ゴルバット『ゴル、ゴルバッ！』
カズナリ「ワニノコ、かわしてアクアテール！」
タクヤ「ゴルバット、ギガドレイン！」
ワニノコ『ワニワニッ！』
ゴルバット『ゴルバッ！ゴルゴル、ゴルバッ！』
タクヤ，カズナリ「行っけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

ドォォォォォォォォォォン！！！！という大きな爆発が巻き起こる。
そして、そこには、
ゴルバット『ゴルバッ！』
ゴルバットが悠然と翔いていた。

カズナリ父「ワニノコ、戦闘不能！ゴルバットの勝ち！よって勝者、タクヤ！」
タクヤ「サンキューゴルバット。ゆっくり休め。カズナリ、すごかったぞ」
カズナリ「はい、ありがとうございます。結局負けてしまいましたけど」
コトネ「カズナリすごい！」
カズナリ父「タクヤ君。君はすごいね。それにカズナリもすごかったぞ」

俺とカズナリのバトルも終わり、俺の対新人用ポケモンは軽い処置をして家に送り、あとの治療はメイドに任せた。いよいよ明日はシンオウに出発する日。カズナリの父さんはホテルに、俺たちはポケモンセンターの自室に戻り、明日に備えてゆっくり休むことにした。

To Be Continued・・・

Setup2　メイド，コトネ，カズナリ（前書き）

今回はタクヤのメイドとこの世界のコトネ&カズナリの設定を発表します

Setup2　メイド，コトネ，カズナリ

～名前～
不明　基本、メイドと呼ばれる
今後名前を公開するかは不定

～姿，服装～
髪は金髪に腰まである長髪
顔は普通に綺麗
身長は１６２くらいで、スリーサイズは上からきゅ「秘密です（はぁと）」
服装は基本メイド服

～人物～
優しく温厚な性格
案外ノリのいい人柄
年は２０くらい（見た感じ）

～ポケモン～
タクヤのポケモンの預かり役兼世話役

～その他～
タクヤがいない間の家のことや、タクヤの世話をするために使わされたメイド
神様曰く、「性欲処〇役として使ってもいい」とのことで、本人も了承

〜名前〜
コトネ

〜姿，服装〜
アニメとすべて同じ

〜人物〜
アニメと全て同じ

〜ポケモン〜
チコリータ、マリル、キリンリキはアニメと同じ
キングラーとマタドガスの二体がアニメと違う

〜名前〜
カズナリ

〜姿，服装〜
アニメとすべて同じ

〜人物〜
アニメと全て同じ

〜ポケモン〜
アニメと同じなのはワニノコ

ゴース↓ゴースト、クロバット、ドククラゲの三体がアニメと違う
なお、アニメ通りフカマルはゲットする予定

Ｅｐｉｓｏｄｅ１７　シンオウ上陸！　ジョウトフェスタ！！

タクヤ「シンオウか……。本気の俺に相対できるトレーナーいないかな」

ここはシンオウ地方行きの飛行艇。シンオウでジョウトフェスタを開くために俺たちはシンオウに向かっているのだ。

コトネ「ねぇおじさん。今回のショーの賞品は？」
カズナリ父「ポケモンの卵だよ」

と言ってカズナリの父さんは孵卵器に入った卵を取り出した。

タクヤ「コトネ、ショーって何をするんだ？」
コトネ「ジョウトの新人用ポケモンのチコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、各地の新人用ポケモンのバトルよ。勝てば賞品として卵を渡すの」
タクヤ「シンオウっつーとナエトル、ポッチャマ、ヒコザルだな」
コトネ「シンオウ地方のポケモン見の楽しみだなー」
カズナリ「僕も楽しみだな」
カズナリ父「そろそろ着くみたいだよ」
タクヤ「ああ、楽しみだなー！」

いざ、シンオウ上陸！

タクヤ「シンオウ上陸だー！！！」
カズナリ父「今からフェスタの準備をするから、カズナリたちはそのへんを見てきてもいいよ」
カズナリ「僕も手伝うよ。コトネたちで行ってきて」

タクヤ「俺、ちょっとナナカマド博士に会ってくるよ。大丈夫、フエスタは明日からだろ？すぐもどるから」
コトネ「ちょっとタクヤ！？」

俺は返答も聞かず、ボーマンダを出して飛び去った。

タクヤ「ボーマンダ、この、マサゴタウンってとこまで頼む」
ボーマンダ『マンダッ！』

そう言ってポケギアのマップ機能を使ってボーマンダに教える。
するとボーマンダはハイスピードで飛び始めた。

一方コトネたちはというと……

コトネ「いいなー、私もナナカマド博士と会ってみたいなぁ」
カズナリ「でもタクヤさん、ボーマンダに乗ってすごいスピードで飛んでいったよ」
カズナリ父「確かにあのスピードは、良く育てられているよ」

そんな風にタクヤについての話で盛り上がっていた。

そして1時間半後。タクヤとボーマンダはもうマサゴタウンの研究所前に来ていた。

タクヤ「御免くださーい！」
ボーマンダ『マンダッ！』
？「はーい？」
タクヤ「ああ、ここの研究員さんですか？俺はトレーナーのタクヤです。ナナカマド博士に会いたいのですが」
研究員「ああ、ナナカマド博士なら中に。どうぞ入ってください」

タクヤ「ありがとうございます。ボーマンダ、お前は戻っててくれ」
　ボーマンダをボールに戻し、ナナカマド研究所に入る。見渡せばいろんな機械があり、そこにナナカマド博士がいた。俺の方をふと見ると、興味深そうに眺めてきた。

ナナカマド「おや、お前さんは？」
タクヤ「俺、ジョウトのトレーナーのタクヤって言います。せっかくシンオウに来たので、研究者の権威であるナナカマド博士に一目お会いしたいと思いましたので」
ナナカマド「そうか、ジョウトのトレーナーか」
タクヤ「俺、聞きたいことがあるんですよ。どこかに強いトレーナーはいませんか？」
ナナカマド「ふむぅ、強いトレーナーか。というとシンジ君や、カントーのマサラタウンから来たというサトシ君だろうか？」
タクヤ「サトシ君って、カントーリーグ、ジョウトリーグ、ホウエンリーグにも出場していたあのサトシ君ですか？」
ナナカマド「そうじゃな」
タクヤ「ありがとうございます。じゃあ、俺は先を急ぐのでこれで」
ナナカマド「もしもサトシ君に会ったらよろしく伝えてくれ」
タクヤ「はい！いくぞボーマンダ！」

　俺は再びボーマンダを出し、飛び立つ。ボーマンダも疲れてきたのか、さっきより遅く、２時間くらいでコトネたちのところに着いた。

タクヤ「ただいまー！」
ボーマンダ『マンダッ！』
コトネ「もう、いきなり飛び立つんだから。で、ナナカマド博士はどうだった？」

カズナリ「それは僕も気になります」

俺はさっきナナカマド博士と話した強いトレーナーのことを話した。まぁ、実名は出さなかったけど。

コトネ「へー、会ってみたいなー」
カズナリ「そうだね」
タクヤ「それじゃあ、この地方で何が釣れるのか、釣りしてこようかな」
コトネ「あっ、私も行く！」
カズナリ父「行ってらっしゃい」
カズナリ「僕はこっちを手伝ってます」

そして、近くを流れる小川で……

タクヤ「何が釣れるかな？」
コトネ「まっ、楽しみってことね」
マリル『リルル～』

コトネはいつの間にかマリルを出していた。

３０分後

タクヤ「釣れねぇな」
コトネ「釣れないね」

そんなことを呟きながら釣りを続ける二人。

タクヤ「はぁ……」
コトネ「釣れない……」

さらに３０分後

タクヤ「釣れない」

コトネ「うん」

まだ釣れない。

またもや３０分後

タクヤ「釣れねぇ」

結局その日は何も釣れずに、俺たちはポケモンセンターでポケモンを回復し、ホテルで一日を終えた。

Episode18　ジョウトフェスタ　in　シンオウ！！

コトネ「マリル～？マリル～！？」
タクヤ「はぁ、またか」

今、シンオウ地方ではジョウトフェスタが開催されている。そして、そのスタッフであるコトネと、そのコトネ一緒に旅する俺は、コトネのマリルを探していた。

タクヤ「俺、ちっと向こう探してくるから」
コトネ「うん。じゃあ私はこっち」

俺たちはそれぞれ違う方向を探しに行く。そして、俺の走る目の前にあったのは、まさにサトシのピカチュウとヒカリのポッチャマがマリルを引き抜いているところだった。

タクヤ「あのー、そのマリル……」
ヒカリ「このマリル、あなたの？」
タクヤ「ああ、違うよ。俺と一緒に旅してるトレーナーのポケモンだよ。いつもすぐいなくなるんだ」
コトネ「タクヤー！あっ、いたいた」
マリル『リルー！』
タクヤ「おう、コトネ」

コトネはマリルをボールに戻し、自己紹介を始めた。

コトネ「私、トレーナーのコトネ」
タクヤ「俺はタクヤだ。まぁ、１６歳だけどあんま気遣わなくていいよ」

コトネ「あなたたちは？」

コトネはサトシたちに話す。

タクヤ「確か、こっちがカントー、ジョウト、ホウエンの三地方のリーグに出場してたサトシ君じゃないか？俺、テレビ見てたんだ」
サトシ「俺のこと知ってるんですか？」
タクヤ「まぁな。で、こっちはカントーはニビシティの元ジムリーダーのタケシ君じゃないか」
タケシ「俺のことも知ってるんですか？」
タクヤ「ま、ジムリーダーとなると何かと有名だろ？で、こっちは？」

俺は、ヒカリについて聞いてみる。もちろん知っているが、怪しまれるだけだ。

ヒカリ「あたしはヒカリ。この子はパートナーのポッチャマ」
ポッチャマ『ポッチャマ！』
サトシ「さっきタクヤさんが言ったけど、俺はサトシ。こっちが相棒のピカチュウ」
ピカチュウ『ピッカッチュウ♪』
タケシ「俺もタクヤさんが言ってたけど、タケシだ。元ニビジムリーダーの今はブリーダーなんだ」
コトネ「ま、よろしくって事ね」
タクヤ「よろしくな」
コトネ「ふーん、ポッチャマかー」

コトネは図鑑を取り出して調べた。

ポッチャマ　ペンギンポケモン。歩くのは苦手で転けたりするが、

プライドは高く堂々と胸を張る。

ヒカリ「それってポケモン図鑑！？」
コトネ「そ、ジョウトじゃこれが最新型なんだ」
サトシ「ジョウトか、懐かしいな」
タクヤ「そうか、サトシ君はジョウトリーグに出場経験があるから、旅したことがあるんだね？」
サトシ「はい」
タクヤ「そだ、コトネ。アレに連れてってやろうぜ」
コトネ「おっ、いいね。面白いとこに連れてってあげる」

そう、ジョウトフェスタに連れてってあげるのだ。

ヒカリ「面白いとこ？」
タクヤ「あっちの広場でジョウトのフェスタやってんだ」
サトシ「フェスタ？」
コトネ「来ればわかるって。さ、行こうよヒカリン♪」

パチン、とウィンクをして、いつものあだ名癖でヒカリちゃんを呼ぶ。

ヒカリ「ひ、ヒカリン？」
タクヤ「悪いな、こいつの悪い癖だ。ま、行こうぜサトシ君、タケシ君、ヒカリちゃん」

そういって俺は三人を引き連れて広場に戻っていった。

ヒカリ「うわぁ」
サトシ「スゲェ」

サトシとヒカリは驚く。結構大きなフェスタだから、驚いてもしょうがない。
そのとき、ピリリリ、ピリリリ、とコトネのポケギアが鳴った。コトネはポケギアを取り出すと、サトシが頭にハテナを浮かべながら聞いてきた。

サトシ「それって？」
コトネ「ポケギアよ。電話とか地図とか、いろんな機能がついてるの」
タクヤ「俺も持ってるし」

俺もポケギアを取り出してみせる。コトネは電話に出る。相手はカズナリだった。

コトネ「もしもし？」
カズナリ［コトネ？今どこにいるんだよ？あとタクヤさんも］
コトネ「タクヤは一緒にいるよ。今すぐもどるから」

コトネは電話を切り、俺達二人はサトシたちに向き直った。

タクヤ「これがジョウトフェスタだ」
コトネ「私たち、このフェスタをあちこちの地方でやって、ジョウトをＰＲしてるの」
サトシ，ヒカリ，タケシ「へぇ」

そのとき、モニターに映像が写った。コトネ出演のＰＶのようだ。

ＰＶコトネ［皆さん、こんにちは］
ヒカリ「あぁ、あれって！」
サトシ「コトネじゃないか！」

ＰＶにコトネが映っているのを見て、サトシたちも驚く。

タケシ「へー、二人はこのフェスタのスタッフなのか」
コトネ「あはははは、まあね／／／／　あんなのもやってるって事ね／／／／」
タクヤ「まぁ俺は飛び入りみたいなもんだけどな」

一時ＰＶを見ていると、タケシがエンジュの舞子さんを見て「舞妓はぁぁぁん」と悶えながら言っていたりした。
そして俺たちはカズナリの父さんが担当しているコーナーに戻ってきた。

カズナリ父「ジョウト名物ボンドリンクに、モーモーミルクが試飲できますよ」
カズナリ「さぁ、どうぞどうぞ！」
コトネ「おまたせー！」
タクヤ「すんません、遅くなりました」
カズナリ「コトネ、タクヤさん」
サトシ「こんにちは」
カズナリ父「ようこそ、ジョウトフェスタへ」

ヒカリはカズナリのワニノコを見つけて、図鑑を取り出した。

ワニノコ　大顎ポケモン。発達した顎を持ち、何にでも噛み付く習性があるので、トレーナーも注意が必要。

ピカチュウ『ピッカ！』
ポッチャマ『ポチャ！』

ピカチュウとポッチャマがワニノコに挨拶する。だが、一睨みして『ワニャ！』、とそっぽをむいた。

ヒカリ「このワニノコ、ずいぶんクールね」
カズナリ「僕のワニノコなんだ。いつもこうだよ。それに、僕の作ったポケモンフーズは、あんまり食べなくて」

そう言うと、タケシはポケモンフーズを一粒取りサクッ、と子気味いい音を立てて少し齧る。そして、

タケシ「渋味が足りないみたいだな。カゴの実はあるかい？」
カズナリ「えっ？」

一成は疑問符を浮かべてカゴの実を取り出した。タケシはそれを磨り潰して粉末状にし、ポケモンフーズに振り掛けてワニノコの前に出した。

タケシ「さぁどうぞ」
ワニノコ『ワニワニワニワニ……』クンカクンカ

タケシが出したポケモンフーズの匂いを嗅ぐ。そして、

ワニノコ『ワニャワニャワニャワニャ』

美味しそうに食べ出した。それを見て「へぇー！」、と感心するカズナリだった。

コトネ「私とタクヤが連れてきたんだよ。どぉどぉ？すごい？」
タケシ「世界一のポケモンブリーダーを目指してるんだ」
カズナリ「うわぁ、本当ですかぁ！？」

タケシ「よし、後でいろんなレシピを教えてあげるよ」
カズナリ「ありがとうございます！」

　そのあと、カズナリの父さんがサトシたち三人に、モーモーミルクから作ったソフトクリームを渡したりして、ジョウトフェスタを楽しんでいる様子だった。

カズナリ父「コトネのお友達かい？」
コトネ「うん。マリルを助けてくれたの」
タクヤ「サトシ君にタケシ君にヒカリちゃんです」
サトシ「初めまして」
カズナリ「僕、カズナリです！」
カズナリ父「カズナリの父です」
コトネ「じゃじゃーん！カズナリのお父さんは、ズバリこのフェスタの責任者って事ね。でもってカズナリは、これでもブリーダーなんだよ？」
カズナリ「これでもなんて酷いな」

　いや、実力的に「これでも」で充分だと思う。

サトシ「コトネは、トレーナーって言ってたよな？」
コトネ「うん。タクヤと一緒に、ジョウトのジムを回ってるの。あなたたちは？」
サトシ「俺は、シンオウリーグに挑戦中さ。シンオウに来て、バッジを7個ゲットしたんだぜ？」
ピカチュウ『ピカピカ！』
コトネ「すごい！私たちは、まだバッジは二個。キキョウジムのウィングバッジと、ヒワダジムのインセクトバッジよ。で、ヒカリンは？」
ヒカリ「あたしは、コーディネーター。今はスイレンタウンのコン

テストを目指してるのよ」
コトネ「へぇ、私はバトル専門だけど、コーディネータの友達ができたの初めてよ」

そんなふうに話しているとき、ワニノコが急に話しかけてきた。

ワニノコ『ワニワニ！』
コトネ「えっ、何、ワニノコ？」
タクヤ「そろそろショーの時間ってことじゃねぇか？」
コトネ「あっ、忘れてた！」
ヒカリ「ショー？」
タクヤ「ジョウトのポケモンを紹介するショー」
コトネ「みんなも是非見ていってよ」
サトシ，ヒカリ，タケシ「うん！」

全員が元気よく頷く。いよいよショーの始まりだ。俺は、カズナリの父さんにあることを頼んでおいたから、そのときが来るのが楽しみだ。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１９　チコリータｖｓポッチャマ！　ショーとあのロケット団と

コトネ「シンオウ地方のみなさん、こんにちは！」

コトネがステージに上がり、来客へ挨拶する。いよいよショーの始まりだ。

コトネ「ジョウト地方のワカバタウンからやって来た、コトネです。ジョウトでは、新人のトレーナーは、チコリータ、ヒノアラシ、ワニノコのどれかをもらえます。シンオウ地方では、珍しいポケモンばかりって事ね」

「わぁー」、と来客たちが興奮している。チコリータやヒノアラシ、ワニノコは滅多に見られないポケモンだからだ。

コトネ「チコリータ、出番よ！それっ！」

チコリータ『チッコ～！』

コトネはチコリータを出す。

ヒカリはチコリータを図鑑で調べていた。

コトネ「あ、あたし？」

ポッチャマ『ポチャ？』

ヒカリが名指しされ、？を頭に浮かべていた。これはアニメのバトルイベントだ。

コトネ「これからチコリータとポケモンバトルをしてもらいたいと思います。ささ、ステージへどうぞ」

コトネはヒカリをステージに上がるよう促す。来客もヒカリを羨ましそうに見ている。

タクヤ「こっからは俺が審判、兼進行として話しましょう。もしコトネのチコリータに勝ったら、記念に素晴らしい賞品を渡します」

ヒカリ「えっ……？　よぉし！」

ヒカリは賞品と聞いて気合が入ったようだ。

タクヤ「これより、コトネｖｓヒカリのバトルを行います。使用ポケモンは一体。どちらかが戦闘不能になったとき、試合終了とします。なお、道具の使用は認められません」

ヒカリ「行くわよ、ポッチャマ！」

ポッチャマ『ポチャー！！』

チコリータ『チコーー！！！』

コトネ「そうこなくっちゃ！！！」

サトシ「ヒカリ、頑張れ！！！」

サトシもヒカリにエールを送る。ヒカリも気合が入っていた。

タクヤ「シンオウの新人用ポケモンｖｓジョウトの新人用ポケモンの組み合わせで贈るバトル！それでは、ポッチャマｖｓチコリータのバトル、始め！」

コトネ「チコリータ、葉っぱカッター！」

チコリータ『ティーッ、コーーーッ！！！』

ポッチャマ『チャーーーーッッ』

タクヤ「チコリータの先制！葉っぱカッターが直撃ぃーーー！！！」

チコリータは葉っぱカッターを放つ。ポッチャマはよけられず、

当たってしまった。

ヒカリ「ポッチャマ、バブル光線！」
ポッチャマ『ポチャー……。ポッチャマァァァァ！！！！』
コトネ「光の壁！」
チコリータ『チコーー』
タクヤ「ポッチャマ、反撃のバブル光線！しかし光の壁で阻まれたァー！！」

ポッチャマはバブル光線を放つが、光の壁に阻まれ、ダメージは半減する。

ヒカリ「ポッチャマ、つつくよ！」
ポッチャマ『ポッチャマーーーーッッッ、チャーーーッッ！！』
チコリータ『チコーーーッッ！』
チコリータ「よしっ、効果は抜群」
タクヤ「おっと、ここでポッチャマのつつくが直撃！チコリータ、大丈夫かぁ？」
カズナリ「チコリータは草タイプだから、飛行タイプのつつくは、ダメージが大きいね」

カズナリが冷静に解説している。その内にヒカリは攻撃を続ける。

ヒカリ「ポッチャマ、もう一回バブル光線！」
ポッチャマ『ポーーチャマーーーーッッッ！！！！』
コトネ「光の壁！」
チコリータ『チコッ！』
タクヤ「おっと、またもや光の壁でバブル光線を防ぐチコリータ！このままではチコリータ、攻撃できずにジリ貧だぞぉ？」

コトネのチコリータは光の壁でガード。しかし全くダメージがないわけではないのでこのままいけばジリ貧だ。

ヒカリ「つつくで突破よ！」
ポッチャマ『チャーーーー、チャーーーーッッ！！！！！』
チコリータ『チコーーーッッ！』
サトシ「決まった！」

チコリータはつつくを受け、吹っ飛ばされた。

タクヤ「あーーーっと、つつくを受けたー！これは戦闘不能か？」

俺はチコリータをのぞき込む。案の定戦闘不能になっていた。

タクヤ「チコリータ、戦闘不能、ポッチャマの勝ち！よって、勝者ヒカリ！」
ヒカリ「やったわ！」
タケシ「光の壁は、バブル光線には効果があっても、つつくには効果はない」
カズナリ「ヒカリの、作戦勝ちってことだね！」
コトネ「私の判断ミスだったって事ね。ごめんねチコリータ。でもよく頑張ってくれたわ」

コトネはチコリータをボールに戻して言った。

ヒカリ「ご苦労様、ポッチャマ」
ポッチャマ『ポチャ！』
コトネ「おめでとうヒカリン」
タクヤ「おめでとう、ヒカリちゃん。ほら」
ヒカリ「ん？」

俺は、ヒカリに孵卵器が入った箱を手渡した。
タクヤ「今、素敵な賞品が手渡されました！」
コトネ「開けてみて、ヒカリン」
ヒカリ「何かしら？」

ヒカリは箱を開けると驚いた。

ヒカリ「わぁ～」
タクヤ「プレゼントはなんと、ポケモンの卵だー！！！！！」
ヒカリ「ポケモンの卵か、すごい！！！」
ヒカリ「ありがとう、コトネ、タクヤさん」
コトネ「どんなポケモンが生まれるかは私にもわからないって事ね」
タクヤ「楽しみにしていなよ？」

そんなおめでとうムードの中、ドォォォォォォォォォォン！という音が鳴り響いた。

ヒカリ「あっ」
コトネ「なんなのあれは？」
サトシ「ロケット団！」
カズナリ「フェスタの試食品をあんなに」
タクヤ「ロケット団？シンオウに何でカントーの組織がいるんだよ」

もちろん、アニメを見ていた俺は知っているが、知っていたら怪しまれるだけだ。このイベントを回避するために、ムサシ、コジロウ、ニャースには、早々と立ち去ってもらおう。

ムサシ「あっ、ジャリボーイ！」

カズナリ父「おい、その試食品を返せ！」
ムサシ「おい、その試食品を返せ！の声を聞き」
コジロウ「光の速さでやってきた」
タクヤ「行けっ、ゲンガー！トリックでその岩と試食品を入れ替えろ！」
ロケット団「え？」
ゲンガー『ガーーーーッッ！！！』

俺はさっさとゲンガーを出し、トリックで岩と試食品を入れ替えた。

タクヤ「出番だテッカニン！シザークロスで気球を粉々にしてしまえ！」
テッカニン『テッカ！』

テッカニンはシザークロスで気球を粉々にする。するとアニメ補正よろしく気球が爆発した。いちいち長(なげ)ぇんだよ、こいつらの登場セリフ。

ムサシ「なんで登場セリフの間に攻撃されるの？」
ニャース「登場してすぐ退場だニャんて」
コジロウ「しかも登場セリフすら言い切ってないぞ」
ロケット団「やなかんじーー！！！！」
ソーナンス『ソォーーーナンス！！』

ロケット団はさっさと退場していった。すると来客全員が「うぉーーー！」とさけんだ。

タクヤ「さんきゅー、ゲンガー、テッカニン」
ゲンガー『ガー！』

テッカニン『テッカ！』
タクヤ「カズナリの父さん、試食品取り返しました」

とにかく、取り返した試食品を、カズナリの父さんに渡した。

カズナリ父「ありがとう、タクヤ君、ゲンガー、テッカニン」
タクヤ「どういたしまして」
ゲンガー『ガー、ゲンガー！』
テッカニン『テッカ、テッカ！！』
コトネ「やっぱりタクヤはすごいって事ね」
サトシ「スゲェ、タクヤさんのポケモン。テッカニンは色違いだ！」
タケシ「このゲンガーとテッカニン、とてもよく育てられているぞ」
ヒカリ「うわぁ、色違いだぁ！」
ポッチャマ『ポチャァ！』

すると、俺をサトシがキラキラとした目で見つめてきた。おっ、これはもしや？

サトシ「タクヤさん、俺とバトルしてください！」
タクヤ「そのことなんだが、ちょっといいかい？」

俺はステージにサトシを上げ、マイクを手にとった。

カズナリ父「おや？タクヤ君、その子にするのかい？」
タクヤ「はい。皆さん、聞いてください！これよりスペシャルイベント、俺ｖｓこのサトシ君の３ｏｎ３のバトルをします！」
サトシ「ええっ？」
タクヤ「もともとこれを計画していたのですが、サトシ君の先程の要望に応えるのにちょうどいいと思い、このイベントの相手をサトシ君に決めさせてもらいました！」

そう、計画していたのはこれなのだ。

タクヤ「バトルフィールドは、この近くの広場を使います。ご覧になりたい人は、今から１０分後、そこの広場に来てください！それでは！」

いよいよ、夢だったサトシとのバトルが始まる！

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

Episode19　チコリータvsポッチャマ！　ショーとあのロケット団と

次の話は、タクヤｖｓサトシの３ｏｎ３ガチバトルです！

Ｅｐｉｓｏｄｅ２０　タクヤｖｓサトシ！　ガチバトル３ｏｎ３！！（前書き）

いよいよ２０話目突入
タクヤｖｓサトシです！！

Episode20　タクヤvsサトシ！　ガチバトル3on3！！

タクヤ「皆さん、俺とサトシ君のバトルのために集まっていただき、ありがとうございます！！」
観客「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！」

観客はさっきのフェスタ以上の人数になっていた。どうやら来客たちが友人を連れてきたり、家族を連れてきたり、噂や話題になっていたようだ。

ヒカリ「すごい人数」
ポッチャマ『ポチャポチャ』
タケシ「タクヤさんのポケモンがどんななのかが勝敗の決め手だな」
コトネ「サトシのポケモンがどんなのかは知らないけど、タクヤはすっごく強いよ。今まで、本気を出したことがないのに、ジムリーダー戦でも戦闘不能になったことないんだから」
カズナリ「たしかに、僕が2体倒したのも、対新人用ポケモンだったみたいだから、今回、本気を出すと言ってたタクヤさんの実力は計り知れないよ」
タケシ「本気を出してないのに、ジムリーダー相手でも一匹も戦闘不能になったことがない!？」
ヒカリ「どれだけ強いのよ、それ……」
ポッチャマ『ポッチャマ……』

おいおい、過大評価しすぎじゃないのか？

タクヤ「では、審判はカズナリの父さん、お願いします」
カズナリ父「それではこれより、タクヤ対サトシのバトルを行う！使用ポケモンは3体。どちらかのポケモンがすべて失われたときに

試合終了とします！」
タクヤ「サトシ君、君はナナカマド博士から見どころのあるヤツだと聞いたよ。だから今回は、本気を出させてもらう。出番だ！押し流せ、スターミー！！！」
サトシ「スターミーか、あいつを思い出すな……。水タイプなら電気タイプ。行けっ、ピカチュウ！」
ピカチュウ『ピカッ！』

俺は手持ちの切り込み隊長、スターミーを出した。

タケシ「タクヤさんはスターミーか」
ヒカリ「相性ではサトシが有利だけど……」
ポッチャマ『ポチャ……』
コトネ「タクヤのスターミーのバトルは初めて見るなぁ」
カズナリ「タクヤさんのポケモンだから、凄そうだな……」

いよいよバトルが始まる。

タクヤ「サトシ君、君が先行でいいよ」
サトシ「はい！」
カズナリ父「それでは、始め！」
サトシ「ピカチュウ、先手必勝！１０万ボルト！！」
タクヤ「かわせ！」
ピカチュウ『ピィカァチューーーーー！！！！！』
サトシ「は、速い！？」

スターミーは一瞬でピカチュウの後ろに回る。

タケシ「あのスターミー、相当な速さだぞ！」
タクヤ「今度はこっちから！スターミー、１０万ボルトをお返しだ

！」
ピカチュウ『チュ、チュゥ……』
タケシ「パワーも相当なものだぞ！」
サトシ「ピカチュウ！クソッ、電光石火！」
ピカチュウ『ピッカァ！！』
タクヤ「サイコキネシスで受け止めろ！」

ピカチュウはサイコキネシスに捕まった。

タクヤ「そのまま上に放り投げてハイドロポンプ！」

上に放り投げ、ハイドロポンプをヒットさせる。その一撃でピカチュウはもうボロボロだった。かろうじて戦闘不能に放っていなかったが……

タクヤ「今の一撃を受けて倒れないとは、相当なガッツだな」
サトシ「このままじゃキツイ。一旦戻れ、ピカチュウ。行けっ、ムクホーク、君に決めた！！」

うーん、生の「君に決めた！」最高！

ムクホーク『ムクホーーーック！！！』
タクヤ「交代か。だったらこっちも。戻れスターミー！掻き回せ、テッカニン！」
テッカニン『テッカ！！！』

俺はテッカニンを出す。やはり不利なタイプを出したことで、観客は驚く。

ヒカリ「テッカニン！？タイプ相性じゃ不利なのに！」

タケシ「もしかして、何か考えがあるのか！？」

テッカニンの出番。コイツは俺の相棒だ。

サトシ「色違いのテッカニン。タイプで不利なのに、何か考えがあるんだろうか……」

タクヤ「コイツは俺のパートナーだ。そして、君は今何で不利なタイプのポケモンを出したか不思議に思ってるだろう？」

サトシ「は、はい」

タクヤ「一つだけ言っておこう。いくら不利でも、当たらなければ意味がない！テッカニン、フルスピード行くぞ！」

テッカニン『テッカ！』

サトシ「さ、さっきより速い！ロケット団の時は本気じゃなかったのか！？ムクホーク、電光石火！」

タクヤ「テッカニン、高速移動から影分身！」

テッカニン『テッカ！テッカ、テッカ、テッカ、テッカテッカテッカテッカ！！！！！！！』

テッカニンのスピードが加速でどんどん上昇していく。この世界では能力の上昇に上限がないので、素晴らしいスピードになっている。

タケシ「あのテッカニン、そうとう速いぞ！分身の数も相当だ！」

ヒカリ「サトシ……」

戦(おのの)くタケシとヒカリ。観客たちもすごい声を上げている。

サトシ「クソッ、全然当たらない！」

タクヤ「ほらっ、まだまだ行くぞ、身代わりから5回連続で剣の舞！！！！」

テッカニン『テッカ！！！』

テッカニンが不思議な踊りを踊る。剣のような影が見えたかと思うと、テッカニンのパワーが上昇していた。

タクヤ「これでテッカニンの出番は終わりだ。心の眼からバトンタッチ！」

俺はテッカニンのボールと、アイツの入ったボールを掲げた。

タケシ「マズイ！バトンタッチだ！」
ヒカリ「バトンタッチ？」
カズナリ「全てのポケモンの変化を受け継いで交代する技だよ」
ヒカリ「ええっ！？それって」
タケシ「ああ。あの影分身も、身代わりも、剣の舞も、高速移動と特性の加速で上昇したスピードも」
コトネ「次のポケモンに受け継がれるって事ね」

俺が次に繰り出したのは、こいつだ。

タクヤ「打ち砕け、ドサイドン！！！」
ドサイドン『ドッサァァァァイドン！！！！！！』
サトシ「なっ、影分身が全てドサイドンになった！？」
タクヤ「テッカニンのバトンタッチだ。すべての変化を受け継いで交換するんだよ。心の眼も受け継いでいるから、技も一度だけ必中だ。ドサイドン、角ドリル！！！」
ドサイドン『サァァァァ！！！！！！！』
サトシ「速いっ！？なんとかかわしてくれ！」
タクヤ「無駄だ！心の眼の効果を受け継いでいる！」
ムクホーク『ムクホォォォォク！！！！』

サトシ「ムクホーク！！！！」
ムクホーク『ム、ムクホー……』
カズナリ父「ムクホーク、戦闘不能、ドサイドンの勝ち！」

観客が盛り上がる。もうドサイドンは止まらない。

サトシ「ムクホーク、ゆっくり休んでてくれ。ハヤシガメ、君に決めた！」
ハヤシガメ『ガメッ！！！』
サトシ「ハヤシガメ、エナジーボール！」
ハヤシガメ『ガァ、メェ！！！』
タクヤ「跳べ、ドサイドン」
ドサイドン『ドサイドォン！！！』
サトシ「跳んだ！？」
タクヤ「高速落下、メガホーン！！！！」

ドサイドンのメガホーンが決まる。体重や重力加速度も重なって、相当な威力になってしまった。

カズナリ父「ハヤシガメ、戦闘不能、ドサイドンの勝ち！！」
サトシ「戻れハヤシガメ、ゆっくり休んでてくれ。ピカチュウ、君に決めた！俺は最後まで全力で戦う！」
タクヤ「うんうん、あきらめない精神。いいね！戻れ、ドサイドン。最後はパートナー対決と洒落込もう。掻き回せ、テッカニン！」
テッカニン『テッカ！！！』

最後のポケモンピカチュウはもうフラフラだ。さっさと決めさせてもらおう。

タクヤ「テッカニン、影分身！そこからシザークロスだ！」

サトシ「ピカチュウ、１０万ボルト！！」
テッカニン『テッカ！』
ピカチュウ『ピィカァチューーーー！！！！』

１０万ボルトは分身に当たり、シザークロスをヒットさせるテッカニン。

タケシ「サトシが勝つのはもう難しいな」
ヒカリ「サトシ、ピカチュウ……」
ポッチャマ『ポチャチャ、ポチャチャー……』

テッカニンは加速しまくり、分身も、消えてもどんどん継ぎ足していく。

タクヤ「これで最後だ！テッカニン、シザークロス！」
サトシ「ピカチュウ、フィールド全体に雷だ！」
ピカチュウ『ピィ、カァ、チューーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！』

雷はすべての分身をかき消した。だが……

ヒカリ「やった、テッカニンを倒した！」
タケシ「いや、こんなに簡単にやられるはずがない」
カズナリ父「テッカニン、戦闘ｈ……」
タクヤ「今だテッカニン、穴を掘る！！！！」
テッカニン『テッカァ！！！！！』

穴から飛び出したテッカニンが、ピカチュウに体当たりをして戦闘不能にした。

カズナリ父「ピカチュウ、戦闘不能、テッカニンの勝ち！よって勝者、タクヤ！」
観客「わあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

一気に観客が盛り上がり、俺とサトシのバトルが終わった。

タクヤ「サトシ君、君は本当に見処のある少年だ。いずれは俺を凌ぐトレーナーになる。頑張れよ」
サトシ「はいっ、ありがとうございます。まさか穴を掘るで地中にいるとは思いませんでした」
タクヤ「君のポケモンにこれを使っておいてくれ」

俺は回復の薬を３つ渡した。

サトシ「ありがとうございます」
ヒカリ「あれ？卵が……」
カズナリ「これはもしかして？」

光の卵も、今孵ったようだ。

ヒカリ「わぁ、ヒノアラシ！」
ヒノアラシ『ヒノヒノ……』
タクヤ「ヒノアラシの卵だったのか……」
ヒカリ「よろしくね、ヒノアラシ」

ヒカリはヒノアラシを抱き上げる。すると背中の炎が燃え上がり、ヒカリの顔がアニメ補正よろしくモジャモジャになってしまった。

ヒカリ「あっつい……」

みんなもアニメ同様笑う。

タクヤ「そうだ、カズナリの父さん」
カズナリ父「ん？なんだい」
タクヤ「ジョウトフェスタが終わっても、シンオウに何日か滞在するんですよね？」
カズナリ父「そうだよ？」
タクヤ「俺、一時サトシ君たちの旅についていきたいんです」
カズナリ「僕も、タケシさんにブリーダーのことをいろいろと教えてもらいたいんだ」
タケシ「俺に？」
コトネ「私も、もうすぐ開かれるスイレンタウンのコンテストを見てみたい！」
カズナリ父「いいよ。君たち、この三人をよろしく頼むよ」
サトシ，ヒカリ，タケシ「はい！」

アニメイベント同様、サトシたちの旅についていけることになった俺達だった。

To Be Continued・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ２０　タクヤｖｓサトシ！　ガチバトル３ｏｎ３！！（後書き）

スターミーのアニメの鳴き声は表現しづらいので、省略させていただきました

Ｅｐｉｓｏｄｅ２１　谷間の発電所は危険が一杯！！

ヒカリのコンテスト出場のため、スイレンタウンを目指す俺達。
今はポケモンたちが食事をしている。

ヒカリ「さぁヒノアラシ、食べて」
ヒノアラシ『ヒノヒノォ♪』

ヒノアラシは喜んで食べ出す。

コトネ「私があげた卵から孵ったんだから絶対良い子って事ね」
タクヤ「スゲェ食べっぷりだな」

ヒノアラシはすごいスピードで食べまくっている。

ポッチャマ『ポチャポチャー！　ポチャ？』

ポッチャマがヒノアラシに気づく。

ヒカリ「ポッチャマ、新しい仲間だから仲良くね」
ポッチャマ『ポッチャマ』

任せろ！と言わんばかりに胸を張るポッチャマ。

ポッチャマ『ポチャポチャ♪』

「よろしく」と言ってるようにヒノアラシに話しかけるポッチャマ。

ヒノアラシ『ヒノォ？ヒノ』プイ
ポッチャマ『チャァ！？』（；゜Д゜）！

ヒノアラシはそっぽを向く。ポッチャマはそれにショックを受けていた。しかしめげずに話しかけるポッチャマ。

ポッチャマ『ポチャ！』
ヒノアラシ『ヒノヒノヒノヒノ』
ポッチャマ『チャァ！？』Σ（゜д゜lll）

また話しかけてそっぽを向かれるポッチャマ。

ポッチャマ『ポォチャァァァァ』ヽ（ｉ Д ｉ）ノ

ポッチャマは怒り出す。そして、ヒノアラシのお尻を啄んだ。

ヒノアラシ『ヒノォ～～～』？（＞д＜）　！！
ポッチャマ『ポッチャッチャッチャ』（　＾∀＾）

痛がるヒノアラシを見て笑うポッチャマ。今度はヒノアラシの反撃。

ヒノアラシ『ヒンノォォォ……。ヒノッヒノッヒノッヒノッ！！！』
ポッチャマ『チャー！ポチャチャチャー！ポチャーーーーッ！！！！』

ヒノアラシは鼻の先でつつく。

ポッチャマ『ポチャァ～』
ヒノアラシ『ヒノォ～』

ピカチュウ『ピカピカ』

ピカチュウが仲介役として入る。ほんと、苦労人だなサトシのピカチュウは。

タクヤ「ったく、何喧嘩してんだよ」
ヒカリ「ダメでしょう、仲良くしなきゃ～」
サトシ「なぁヒカリ、バトルしてみないか？」
ヒカリ「バトル？」
タクヤ「確かに、ヒノアラシのことを知るには、バトルが一番だからな」
ヒカリ「そうね。ヒノアラシ、バトルよ」
ヒノアラシ『ヒノヒノーッ！！』

サトシとヒカリのバトルか……

サトシ「俺のポケモンは、ハヤシガメ、君に決めた！」
ハヤシガメ『ガァメ！』
ヒカリ「ヒノアラシの使える技は」

ヒカリは図鑑を取り出し、技を調べ出した。

ヒノアラシの使える技は、火炎車、スピードスター、煙幕。

ヒカリ「うん、なかなかの技を覚えてるわね」
サトシ「いくぞヒカリ！」
ヒカリ「いいわよ」
サトシ「ハヤシガメ、葉っぱカッター！」
ハヤシガメ『ンガァ！』
ヒノアラシ『ヒノッ！』

ハヤシガメのハッパカッターをジャンプでかわす。なかなかの身のこなしだ。

ヒカリ「ヒノアラシ、火炎車！」
ヒノアラシ『ヒノッ、ヒノォ！！！！』
ハヤシガメ『ガァメ！！！』
サトシ「やるなぁ、ヒノアラシ。いい火炎車だ！」
ヒノアラシ『ヒノヒノォ』
サトシ「これならどうだ？ハヤシガメ、エナジーボール！」
ヒノアラシ『ヒノッ』

またもジャンプでかわす。

ヒカリ「ヒノアラシ、スピードスター！」
ヒノアラシ『ヒィノッッ！！！』
ハヤシガメ『ンガンガッ！！！』

ヒノアラシのスピードスターがクリーンヒット。ハヤシガメが呻く。

サトシ「行くぞ、ハヤシガメ！葉っぱカッター！」
ハヤシガメ『ガメッ！』
ヒノアラシ『ヒノッ！』

またまたジャンプでかわすヒノアラシ。本当にすごいやつだ。

ヒカリ「ヒノアラシ、煙幕！」
ヒノアラシ『ヒノォ』

煙幕を撒布するヒノアラシ。

ヒカリ「続けてスピードスター！」
ヒノアラシ『ヒィノッッ！』
ハヤシガメ『ンガッ！』
コトネ「やるぅ！」
サトシ「まだまだぁ！ハヤシガメ、ロッククライム！」
ハヤシガメ『ガァァァァ、ンガァァァァァ！！！』
ヒノアラシ『ヒノォォォォ！』
ヒカリ「ヒノアラシ、大丈夫？」
ヒノアラシ『ヒノヒノォ！』
タケシ「そこまで！」
ヒカリ「え？」
タケシ「最初のバトルだし、ここまでにしておこう」

タケシがそう言って止める。あれ？何か忘れてるような……？

ポッチャマ『ポチャポチャーーー！』

ポッチャマがハヤシガメに何か言っている。

ヒカリ「すごかったわーヒノアラシ」
タケシ「なかなかだったぞ」
カズナリ「かっこよかったよー」
コトネ「初戦にしては、ヒノアラシ、あなたがんばったって事ね」
ヒノアラシ『ヒノヒノォ！』
ポッチャマ『チャー……』

ヒノアラシが褒められ、呆然としているポッチャマ。

ヒカリ「はぁい、ご褒美にあなたの好きなポフィンよ」
ヒノアラシ『ヒノヒノッ♪』
ポッチャマ『ポーーーーッチャマ！』

ヒカリがヒノアラシにあげたポフィンを、ポッチャマが奪った。

ヒカリ「何するのよポッチャマ」
ポッチャマ『ポチャッ』（ー。ー）
ヒノアラシ『ヒノォォォォ、ヒノッ』
ポッチャマ『ポチャッ！？』

ヒノアラシがキレてポッチャマに頭突きした。
またも喧嘩が勃発する。

ヒカリ「止めなさい二人とも！やめないとご飯ヌキ！」
ピカチュウ『ピカピィカ、ピカチュウ。ピィカ……』

またもピカチュウが止めに入った。

コトネ「なかなか難しいって事ね」
カズナリ「あれっ、コトネ。マリルは？」
コトネ「えっ、マリル？そこにいない？」
カズナリ「いないよ」

えっ？ヤベェ、マリルさまよいイベント忘れてたァァァァァァァァァ！！！！！

コトネ「また勝手にどっか行っちゃったのかしら？」

結局みんなで探すことになりました。

サトシ「マリル～？」
ピカチュウ『ピカピカァ～？』
タクヤ「マリル～？」
ヒカリ「どこ行ったの～？」
コトネ「マリル～？」
ポッチャマ『ポ～チャァ～？』
ヒノアラシ『ヒノヒノ～？』
ポッチャマ，ヒノアラシ『ん？』（ー　っー）

またも向き合って争う。
坂道を登った先にあったのは、谷間の発電所だった。

サトシ「あれは？」
タクヤ「あれは谷間の発電所だね」

ポケギアで調べてから言う。

タクヤ「おそらくあそこに迷い込んだんだろう」
サトシ「行ってみよう！」

行って、覗いてみる。やはりマリルがいた。

コトネ「あっ、いた！」

マリルを見つけるが、マリルが建物に入っていくと、自動ドアが閉じた。

コトネ「あぁ～」

俺たちはマリルを追いかけ、入る。するとポッチャマがヒノアラシを突き飛ばし、またも喧嘩が勃発した……かと思われたが。

ポッチャマ『ポチャァァァァ』

電気を受けてしびれていた。

ヒカリ「ポッチャマ！？」
コイルA『ビRRRRR』
コイルB『ビRRR、ビRRR』
カズナリ「コイルだ」
タクヤ「多分、警備をしてるんだろう」

追いかけてきたので俺たちは必死に逃げる。そして、中央管制室へと転がり込んだ。そこには管理人らしき人が眠っていた。

管理人「ん？なんじゃお前さんたちは？」
コトネ「あの、勝手に入ってすみません。実は、私のポケモンが、ここに迷い込んだんです」
管理人「ほう、ポケモンがのぉ」
コトネ「はい。マリルなんです」
管理人「それならこの警備モニターで館内を全て見られるぞ」

そう言ってくれた直後、さっきのコイルが入ってきた。

コイルA，B『ビRRRRR』
管理人「あー、まてまて。この子達は怪しいもんじゃないぞ」
コイルA，B『ビRRRR、ビ、ビ』

どうやらこの人がコイルの主人のようだ。

コトネ「えーっと、あっ、いたいた」

やっとマリルを見つけた。地下の倉庫だと教えてもらい、俺たちはそこへ直行した。

コトネ「マリル〜？」
ポッチャマ『ポチャポーチャ！』
ヒノアラシ『ヒノヒノ！』
サトシ「マリル〜？」
タクヤ「どこだ〜？」
コトネ「マリル〜？あぁっ！」
マリル『リィ？リルゥ！』（＾＾）／
コトネ「マリル〜！もう、勝手に行っちゃダメだって言ったでしょ」
マリル『リルリルゥ』
ヒカリ「よかったわね。さ、戻りましょ」

そう言ったとたん、バチンッ、という音を立てて停電した。そう思ったらすぐ回復した。俺たちは閉じ込められ、ヒノアラシとポッチャマは締め出された。閉じ込められた俺たちは、いったいどうなるのか！？

To Be Continued・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2786z/

人生オワタ＼(^o^)／からポケモンの世界に転生した

2011年12月20日22時52分発行